南あわじ市文化財調査報告書　第２集

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ

２００５年度　埋蔵文化財調査

２００９年３月

南あわじ市教育委員会

木戸原遺跡（３次調査）　４区（上が南）

木戸原遺跡（３次調査）　４区　遺構 11　毛抜き形鉄製品出土状況

木戸原遺跡（３次調査）　４区　出土した鉄鋌

木戸原遺跡（３次調査）　４区　遺構 16　玉類出土状況

木戸原遺跡（３次調査）　４・５区　出土した石製品

はじめに

三原郡４町が合併し、南あわじ市が誕生して早くも４年が経ちました。

合併後も圃場整備事業を始めとする大規模開発の波は留まることなく、今回報告を行う平成17年度も非常に調査量の多い年でありました。

その中でも木戸原遺跡では、勾玉や管玉といった様々な古墳時代の石製品が出土し、話題となりました。その出土量は県下でも最大級と言うことで、大和王権がいかに淡路島を重要視していたかを物語る証となるものです。

発掘調査から得られた新たな知見の増加が、南あわじ市、ひいては淡路島の歴史やその重要性を明らかにしつつあることは、文化財行政にとって非常に喜ばしいことと言えます。

今回年報という形で不十分さもあるとは思いますが、今後もさらなる努力により本市の文化財保護と理解に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し、心よりお礼申し上げます。

南あわじ市教育委員会
教育長　塚　本　圭　右

例　　言

1．本書は、南あわじ市教育委員会が2005（平成17）年度に実施した、埋蔵文化財調査の記録である。

2．調査は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘貢・定松佳重・的崎薫・谷口梢（現丸亀市教育委員会）が担当した。

3．出土遺物の整理作業は、宇治田力・垣脇美奈子・堺民樹・新崎都・筒井健司・豊田亜希子・桝本早苗・濱本善美が行った。

4．本書の編集は、南あわじ市教育委員会の山崎が行った。執筆・レイアウトは文末に記している。調査担当者については、調査一覧表に記す。

5．各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、多くの方々のご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する（敬称略）。

伊藤宏幸・浦上雅史・大平茂・岡本稔・川吉知子・栗林誠治・定森秀夫・関真一・寺沢薫・寺沢知子・長浜誠司・深井明比古・前田敬彦・村上恭通・森岡秀人・森本徹・山上雅弘・吉田和彦・渡辺昇

目　　次

巻頭写真図版

はじめに

例　　言

第1章　埋蔵文化財事業の動向 …… 1

第2章　埋蔵文化財調査の成果

第1節　埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図 …… 2

第2節　主な埋蔵文化財調査の成果

木戸原遺跡（1次調査） …… 4

高萩遺跡（1次調査） …… 7

木戸原遺跡（2・3次調査） …… 11

九蔵遺跡（1次調査） …… 23

高萩遺跡（2次調査） …… 29

九蔵遺跡（2次調査） …… 35

淡路国分寺（16次調査） …… 42

第3章　資料紹介

戒壇寺跡採集軒平瓦（個人蔵） …… 43

第１章　埋蔵文化財事業の動向

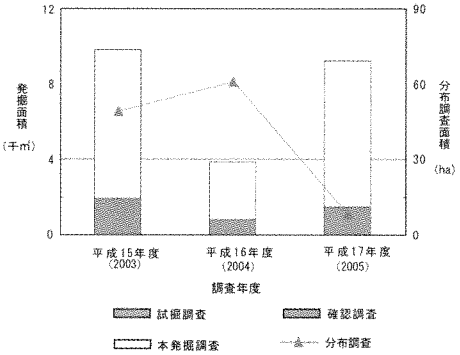
平成17年度は、分布調査８件、試掘調査１件、確認調査４件、本発掘調査３件、立会調査１件の調査をそれぞれ行った。試掘・確認・本発掘調査の合計調査面積は、9,248㎡となる。三原郡４町合併直前の平成15年度の発掘調査面積9,821㎡とほぼ等しい調査量となる。

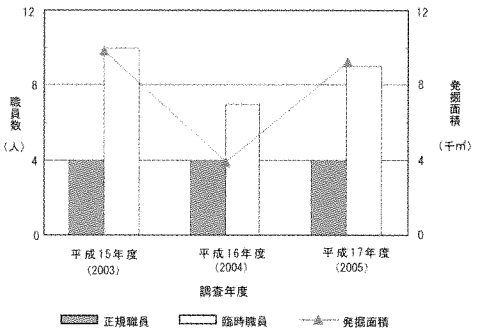
主な発掘調査は、県営圃場整備事業の大日川東地区（賀集福井地区）・市西地区（市三條～志知中島地区）、団体営圃場整備事業の東沖田地区（阿万東町地区）などで実施しており、圃場整備事業に伴う調査の割合が高いのが特徴となっている。また市西地区の木戸原遺跡では古墳時代中期を中心とする大規模な集落跡、東沖田地区の九蔵遺跡では、縄文時代から中世までの集落跡をそれぞれ確認するなど大きな成果となった。

年　　度	分布調査	試掘調査	確認調査	圃場整備確認調査	本発掘調査	圃場整備本発掘調査	発掘面積	職員数	
								正　規	臨　時
平成15(2003)年度	49.3	12.0	1,943.4	1,621.0	7,866.5	6,017.9	9,821.9	4	10
平成16(2004)年度	60.8	0.0	833.0	809.0	3,050.3	1,410.0	3,883.3	4	7
平成17(2005)年度	8.6	24.0	1,464.0	1,464.0	7,760.8	7,760.8	9,248.8	4	9

＊単位：分布調査（ha）調査面積（㎡）@臨時の職員数はその年度の最高人数

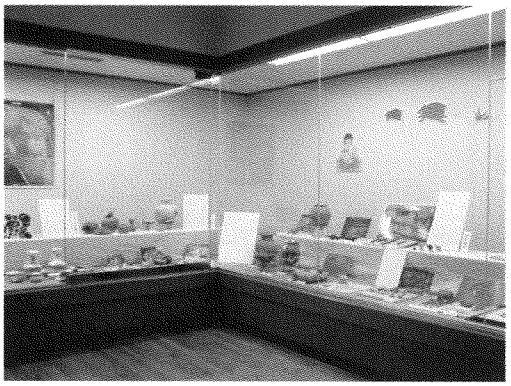
調査量と職員数の推移１





調査量と職員数の推移２

啓蒙普及活動としては、平成17年１月26日から３月21日の間で「発掘！いにしえの食文化」と題する古代の食がテーマの展示会を淡路人形浄瑠璃資料館と南淡図書館で行った。本展示会は、県立考古博物館建設の先行事業として兵庫県と共催で、洲本市をメイン会場に淡路・南あわじ市の三会場でそれぞれ文化財関連の催しを行った。南あわじ市では、展示期間中の３月18日に淡路国分寺などをめぐる市内の文化財ハイキングを実施した。　（坂口）



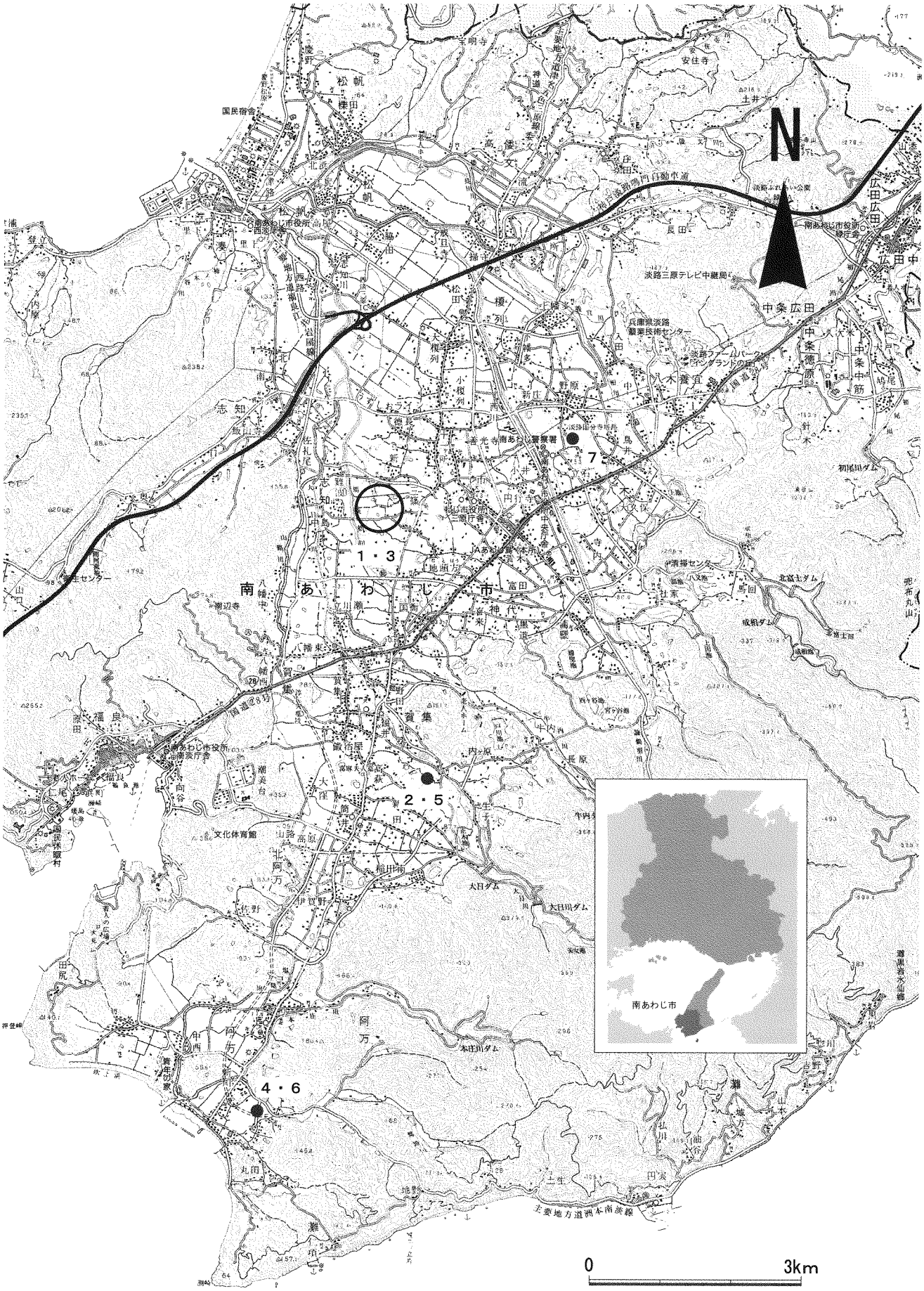
展示会の様子
（淡路人形浄瑠璃資料館）

文化財ハイキングの様子
（国分寺）

第２章　埋蔵文化財調査の成果

第１節　埋蔵文化財調査一覧表及び調査位置図

No.	事業名	所在１	所在２	内容	担当者	遺跡名	調査期間	成果概要
	宅地造成事業（民間）	広田	中筋	分布	定松		H17. 5.19	遺物未採集。
1	経営体育成基盤整備事業（市西地区）	市 市 志知	三條 新 中島	確認	定松・的崎・谷口	木戸原	H17. 6.13 ～7.1	弥生時代中期～中世の遺構・遺物確認。古墳時代の勾玉出土。
	市71･79号線道路改良事業	市	福永	分布	坂口		H17. 6.15	遺物未採集。
	神代70号線道路改良事業	神代	喜来	分布	坂口		H17. 6.15	遺物未採集。
	賀集66号線道路改良事業	賀集	立川瀬	分布	坂口		H17. 6.15	遺物未採集。
2	経営体育成基盤整備事業（大日川東地区）	賀集	福井	確認	山崎	高萩	H17. 6.20 ～11.9	弥生時代・中世の遺構・遺物確認。
	土井線道路改良事業	倭文	土井	分布	坂口		H17. 6.27	遺物未採集。
	榎列１・４・８号線道路改良事業	榎列	掃守	分布	坂口		H17. 6.27	土師器採集。
	賀集59号線排水路補修事業	賀集	立川瀬	分布	坂口		H17. 6.27	遺物未採集。
3	経営体育成基盤整備事業（市西地区）	市 市 志知	三條 新 中島	本発掘	定松・的崎・坂口・谷口	木戸原	H17. 8. 1 ～ H18. 2.27	弥生時代中期～中世の遺構・遺物確認。特に古墳時代の大型建物・韓式系土器・鉄鋌・滑石製祭祀遺物が確認された。
4	基盤整備促進事業（東沖田地区）	阿万	東町	確認	山崎	九蔵	H17.10.13 ～11.16	**縄文時代**～中世の遺構・遺物確認。
	経営体育成基盤整備事業（大日川東地区）	北阿万	筒井	確認	山崎		H17.11. 7 ～8	遺構・遺物未確認。
	共同住宅建設事業（民間）	神代	地頭方	分布	坂口		H17.12. 6	土師器・須恵器採集。
5	経営体育成基盤整備事業（大日川東地区）	賀集	福井	本発掘	山崎・谷口	高萩	H17.12.12 ～ H18. 1.31	弥生時代後期・室町時代の遺構検出。
	共同住宅建設事業（民間）	神代	地頭方	試掘	坂口		H17.12.26	遺構未確認。
6	基盤整備促進事業（東沖田地区）	阿万	東町	本発掘	山崎・谷口	九蔵	H18. 1. 4 ～2.15	縄文時代～中世の遺構検出。
7	特定環境公共下水道事業（立石地区）	八木	国分	立会	山崎・谷口	淡路国分寺	H18. 2. 2 ～8	撹乱層厚く、遺構・包含層未確認。

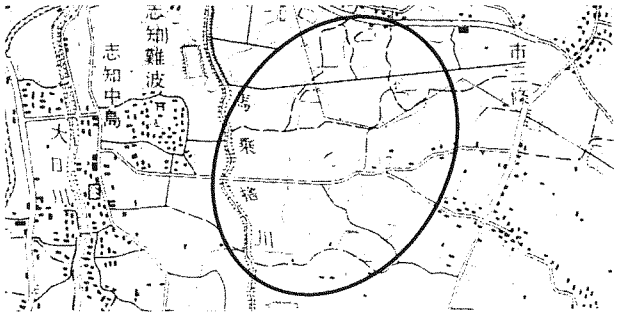


調査位置図

第２節　主な埋蔵文化財調査の成果

木戸原（きどはら）遺跡　－１次調査－

所 在 地　　市三條～志知中島字木戸原外
事 業 名　　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　　定松佳重・的崎薫・谷口梢
種　　別　　確認調査
調査期間　　平成17年６月13日～７月１日
調査面積　　704㎡（176ヶ所）



調査の位置

１　調査内容

本調査対象地の周辺には北に弥生時代後期・中世の円座遺跡、南北朝時代の富永館跡・階出屋敷館跡、南東には奈良時代の山惣（やまそう）廃寺跡、南西には弥生・奈良時代の嫁ヶ渕遺跡が立地する。また調査地の約500ｍ東を推定南海道が南北に通る。

No.７・18　No.７調査区の南西隅と北東隅に柱穴を確認した。調査区外へと続くため正確な規模は不明であるが直径は約１ｍあり、最上層からは８～９世紀の須恵器壷が出土している。２基の遺構は同一建物を構成する柱穴であると考えられ、１間の距離が約2.4ｍと広く、柱穴の規模も大きいことから、大型の掘立柱建物と推測される。No.18でも調査区北西隅に大型の柱穴を確認した。No.７とNo.18は約40ｍ離れているが同様の建物と思われ、一般集落ではない大型建物が建ち並んでいた可能性が考えられる。

No.９　調査区外へと続く大きな土坑を確認。遺構からは古代の土師器が多く出土しているが、須恵器や黒色土器は見られない。後世の削平が包含層や遺構上層部にまで及んでいる。

No.25　２面の遺構面を確認。第１遺構面では柱穴を３基、第２遺構面では柱穴を２基確認した。遺構からの遺物は未確認である。

No.30　２面の遺構面を確認。第１遺構面の溝からは、弥生後期の土器が出土している。第２遺構面である地山をベースにした溝からは、遺物は出土していない。

No.38　小土坑と東西に走る溝を確認。溝は幅60～100㎝・深さ50㎝で最下層では袋状に広がっている。中層から凹基無茎式石鏃が１点出土している。

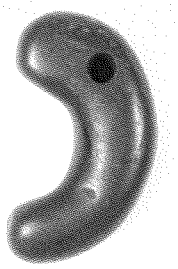
No.43　一番遺構が密集していた調査区である。遺構には焼土塊や炭が含まれていた。遺構からの出土遺物は、明確な時代の特徴は見られないが古墳時代の可能性がある。

No.46　調査区の北側へと続く大きな土坑を確認した。土坑から弥生土器が多く出土している。

No.48　弥生土器を含む土坑１基と小土坑３基を確認した。

No.50　黒褐色粘質土と地山である淡黄色粘質土の遺構面を２面確認した。地山に掘り込まれた遺構から弥生土器と思われる遺物が出土している。

No.59　地山のほぼ直上から硬玉製の勾玉が出土した。勾玉は重量5.5



No.59　出土勾玉

g・全長3.0cm・最大厚1.0cmで、穿孔は貫通し、孔径は0.3cmである。片側穿孔であることなどから古墳時代前半のものである可能性が高い。遺構は溝状のものや小土坑を確認した。

No.76　調査区の北東隅に落ち込み状の土坑を確認した。

No.79　表土下約25cmで溝状遺構を確認した。水流の痕跡は見られず、遺物も出土していない。

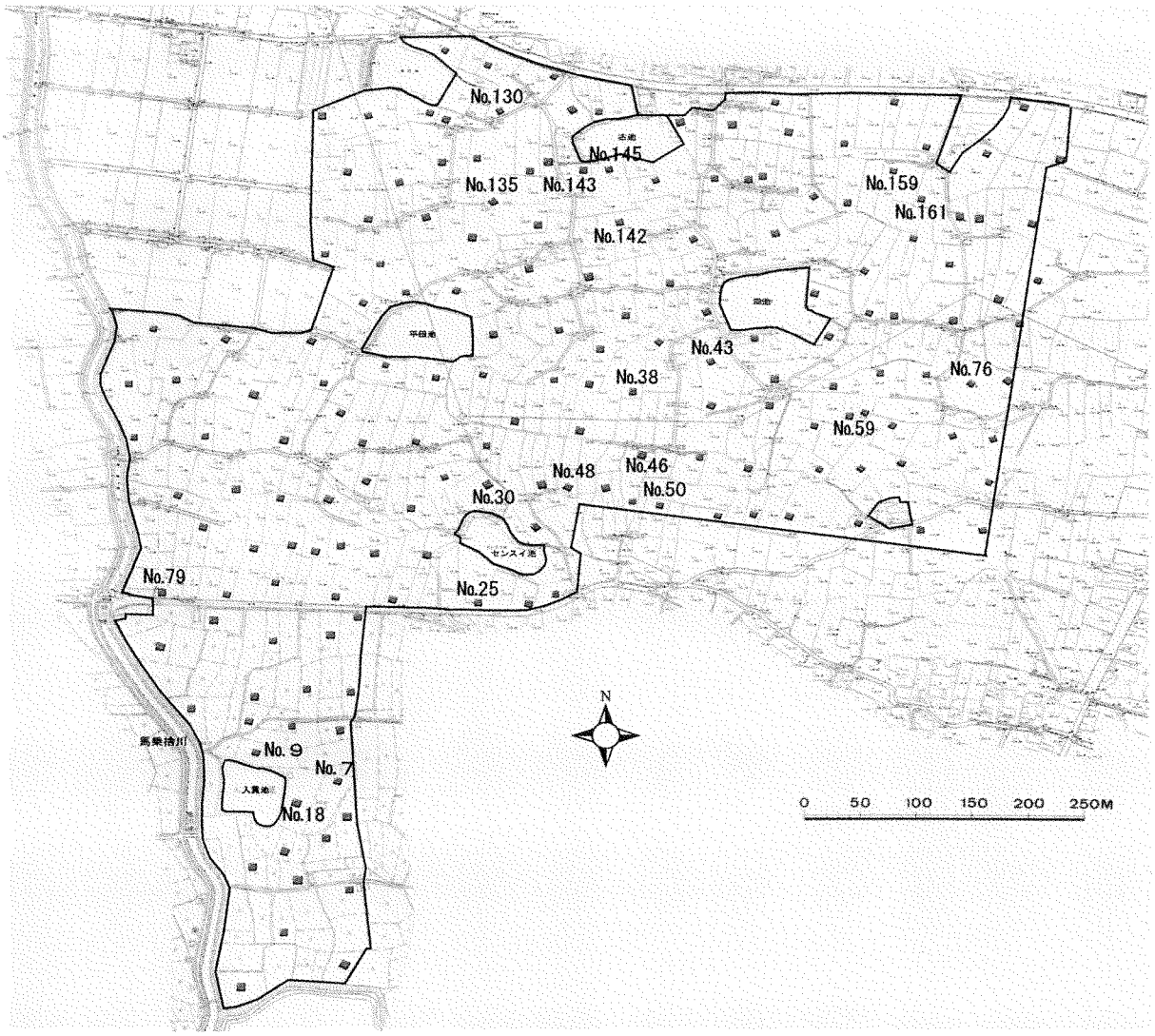
No.130　表土下約50cmの黒色シルトより多量の土師器・須恵器・弥生時代後期の土器片が出土した。谷筋にあたるため周辺よりの流れ込みであるが、出土量や破片の大きさを考慮すると近辺に集落が埋蔵されている可能性が非常に高い。

No.135　表土下約50cmの弥生中期の遺物包含層を切り込んだ溝状遺構より、古墳時代前半の完形に近い土師器甕が2個体出土した。そのうち1個体は外面に格子タタキが施された韓式系土器である。

No.142　南から西に屈曲する小規模な溝を確認し、弥生時代と思われる土器片が出土した。

No.143・145　溝状遺構を確認し、古墳時代前半の土器が出土した。No.145では平坦面を持つ段差を確認した。この段差は焼土と炭化物を多く含む土で覆われており、竪穴住居の可能性が考えられる。

No.159　幅約80cm深さ約30cmの土坑を確認した。検出当初木棺墓と思われたが床面は平坦ではなく、木棺の痕跡は見られない。



調査区設定図

No.161　凹凸の激しい落ち状遺構を確認した。青磁碗や備前焼など中世の遺物を含む。

2　まとめ

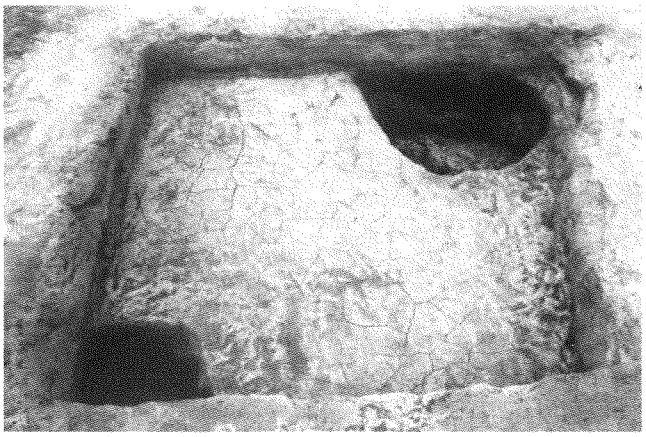
調査対象地内には小規模な谷が幾筋も埋没しており、それを堰き止める形でため池が多く点在する。それらの間にある微高地上に、弥生時代中期から中世にかけての遺構・遺物を確認した。

弥生時代の遺構としては調査対象地中央南部にある皿池とセンスイ池にかけての緩やかな微高地上を中心に展開していると考えられる。また、馬乗捨川近辺と調査対象地北部の谷部に土器の出土は集中しており、北に立地する円座遺跡との関連が考えられる。

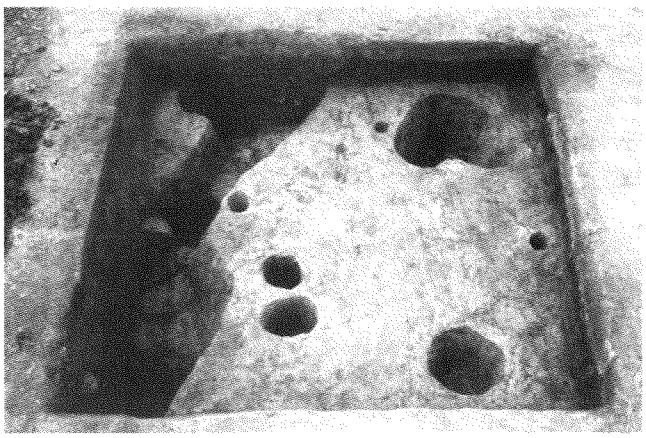
古墳時代はNo.143・145付近を中心に調査対象地北部で遺構・遺物を確認し、No.145では住居の可能性がある遺構が見られた。またNo.59では古墳時代前半頃と考えられる勾玉も出土している。古墳に伴う遺物とも考えられるが、周辺には古墳の痕跡は見当たらない。これまでに確認されている市内の古墳時代前半の集落は幡多遺跡と鈩田遺跡だけであったが、新たな事例となった。

古代の遺構は調査対象地の南部で見られる。No.7・18で確認した大型の柱穴は、700m南西に位置する奈良時代前半の官衙である嫁ヶ渕遺跡（賀集立川瀬所在）の建物群を構成する柱穴と類似している。また、ここは馬乗捨川から100mほど離れた所に位置し、嫁ヶ渕遺跡も大日川から100mほど離れた所に位置していることから立地状況も似ているといえる。大日川は馬乗捨川から500m西を流れる川であり、嫁ヶ渕遺跡では古代にこの川を利用して物資の集散をする港の役割も果たしていたことから、木戸原遺跡においても同様の施設か倉庫群が存在した可能性が考えられる。

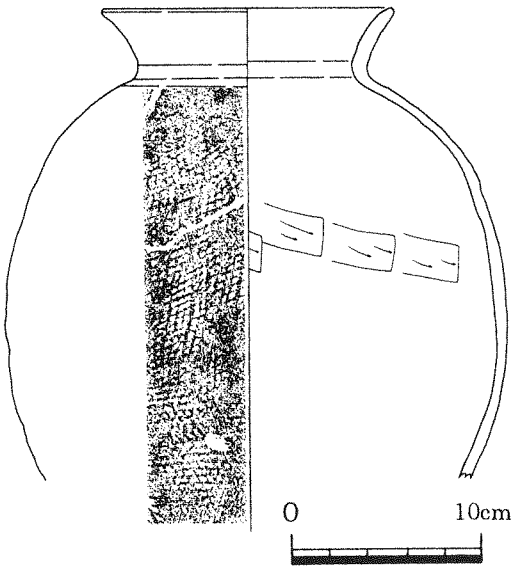
中世は調査範囲全域に散在し、鎬蓮弁文青磁碗や羽釜から13世紀代と備前焼壷から15世紀代が考えられる。　（定松・的崎）



No.7（北より）



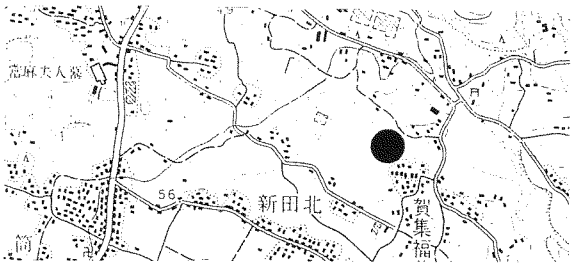
No.43（南より）



No.135　出土韓式系土器

高萩（たかはぎ）遺跡　－１次調査－

所 在 地　賀集福井字高萩外
事 業 名　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　山崎裕司
種　　別　確認調査
調査期間　平成17年６月20日～11月９日
調査面積　520㎡（130ヶ所）



調査の位置

1　調査内容

調査地は三原平野を流れる主要河川の一つである大日川の上流域左岸に位置し、周辺には扇状地地形が広がる。当遺跡から上流域に、弥生時代の遺跡がいくつか分布する。当遺跡や細田遺跡は周知の遺跡で、以前から弥生時代の石鏃等が採集されている。また祢（ね）つノ木遺跡では発掘調査が行われており、弥生時代終末期の土坑等が検出された。（『南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』2008）

埋蔵文化財の確認された調査区は、№60・73・74・80である。

№60では、土坑等の遺構が検出されている。遺構からは15～16世紀頃と思われる土師器皿等が出土している。周辺調査区では包含層や遺構面は確認できなかったため、遺跡は№60を中心とした小さな範囲（遺跡範囲Ａ）に分布すると考えられる。

№73・74では柱穴等が検出されている。№73の２層は中世の遺物包含層で、蓮弁文の青磁碗・東播系須恵器鉢・土師器皿等が出土しており、およそ14～15世紀頃の遺物である。№73・74周辺を遺跡範囲Ｃとする。

№80では土坑等が検出されている。遺構からの出土遺物は小片で時期不明であるが、堆積土中から弥生時代中期後半頃の土器が出土している。周辺調査区では包含層や遺構面は確認できなかったため、№80を中心とする小さな範囲（遺跡範囲Ｂ）と考えられる。

包含層や遺構面は確認できなかったが、№87の盛土層から磨耗した弥生時代後期後半頃の土器が出土している。№87は谷筋に当たることから、耕地開発時に遺跡が分布した周辺の高い場所を削平し、盛土にしたと考えられる。

2　まとめ

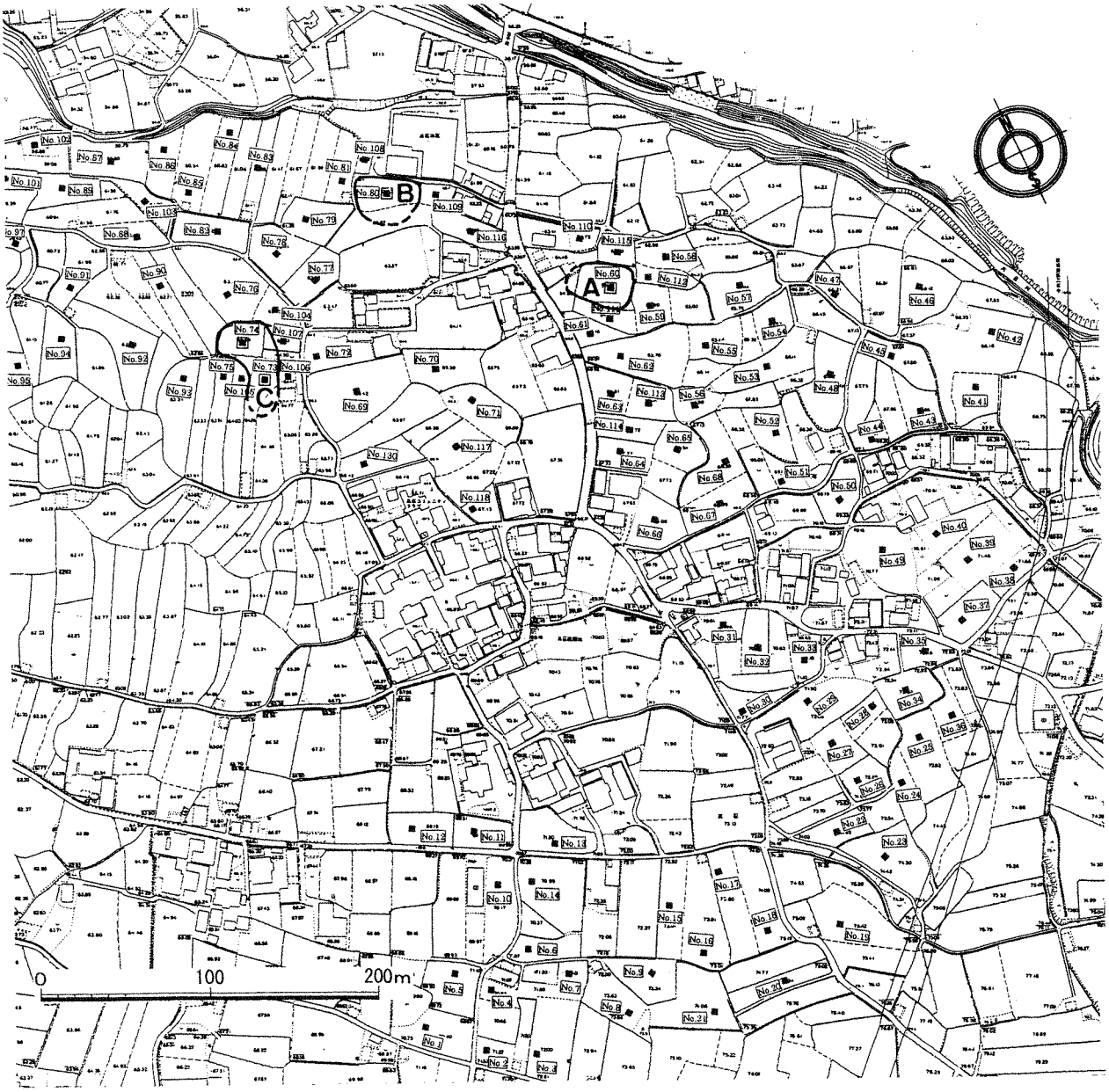
これまで周知の遺跡とされてきた南側の調査地では、表土層で石鏃を採集したものの、遺構や包含層を確認することはできなかった。上記のように調査地北側の遺跡範囲Ａ～Ｃで埋蔵文化財の包蔵を確認した。

全体的に礫が多い土壌で、中には人頭大のものも見られ、平野部と比べ耕地としての条件は悪い。また高低差の大きい河岸段丘が発達しているため、水利の便も悪い。遺跡範囲Ａ・Ｃはいずれも比較的礫が少なく、条件の良い場所を選んでいるようである。周辺の耕地開発は平野部よりかなり遅れると推定されるが、周辺で本格的に土地開発が行われ始めるのは、当調査の出土遺物を見る限りでは14世紀頃と思われる。

遺跡範囲Ｂでは弥生時代中期後半と思われる遺構が確認できた。また遺構等を確認することはできな

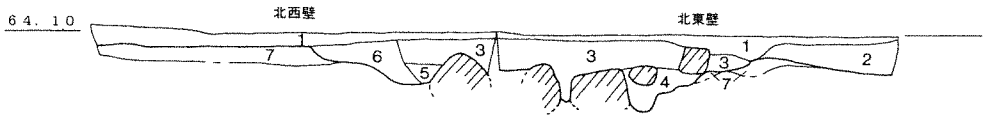
かったが、No.87周辺にも弥生時代後期に遺跡が分布したと考えられる。

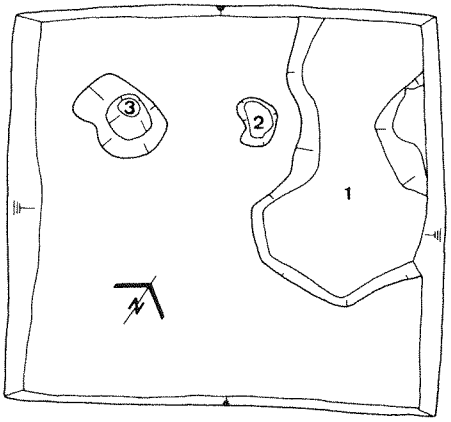
弥生時代の遺跡の特徴として、発達した段丘上に立地していることと、遺跡の規模が非常に小さいことが指摘できる。（山崎）



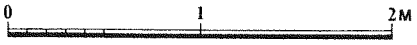
調査区設定図

No.60

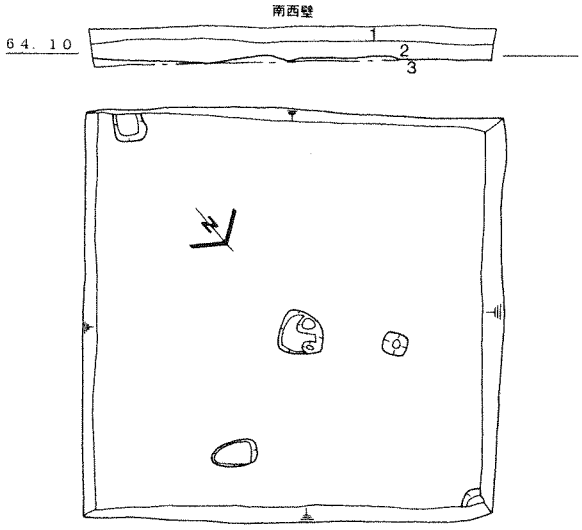




1　5Y6/1 灰色砂質土（Fe•Mn 沈着、床土）
2　2.5Y5/1 黄灰色砂質土（Mn 沈着）
3　2.5Y5/1 黄灰色砂質土（炭・焼土・遺物含む、焼り礫少し含む、Fe•Mn 少し沈着）
4　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土
5　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土
6　2.5Y5/3 黄褐色砂質土（遺物少し含む、Fe•Mn 少し沈着）
7　2.5Y7/6 明黄褐色礫混砂（10～30cm大の礫、Mn 少し沈着、地山）

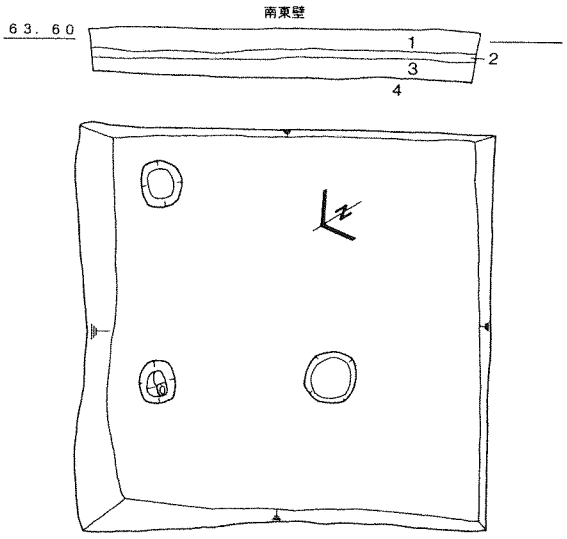


No.73



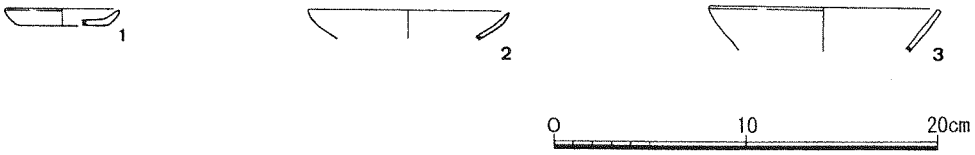
1　10YR6/2 灰黄褐色砂質土（焼り礫含む、Fe 沈着）
2　10YR5/1 褐灰色砂質土（炭・遺物含む）
3　7.5YR6/6 橙色粘砂質土（地山）

No.74



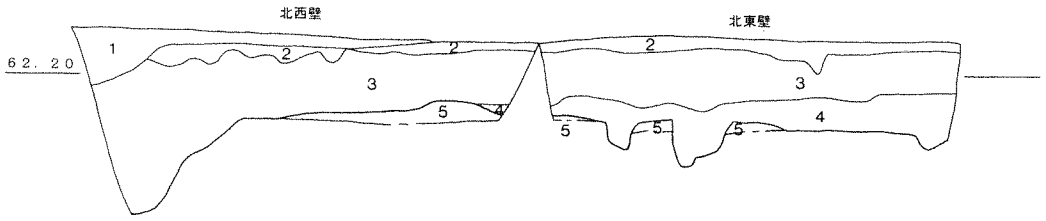
1　2.5Y6/1 黄灰色砂質土（焼り礫含む、耕土）
2　2.5Y6/2 灰黄色砂質土（Fe 沈着、床土）
3　2.5Y5/1 黄灰色粘細砂質土と 4 混じる（Mn 沈着）
4　7.5YR6/6 橙色粘砂質土（地山）

調査区平面・層序図

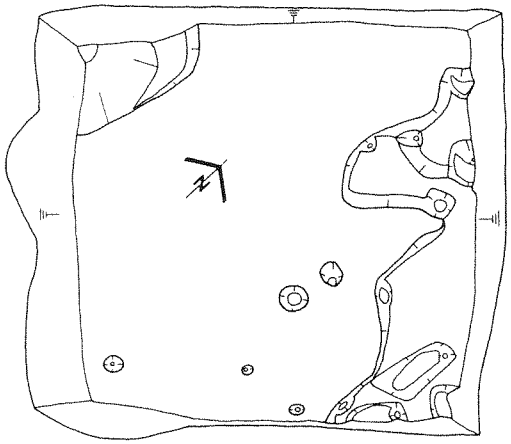


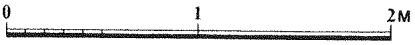
出土遺物（1・2　No.60 遺構 1　3　No.73　2 層）

No.80

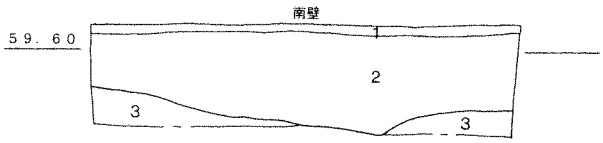


1　5Y6/1 灰色細砂質土（耕土）
2　10YR6/2 灰黄褐色砂質土（Fe•Mn 少し沈着、床土）
3　10YR3/1 黒褐色粘細砂質土（遺物含む）
4　10YR4/1 褐灰色粘砂質土と 5 混じる
5　10YR6/6 明黄褐色砂質土（地山）



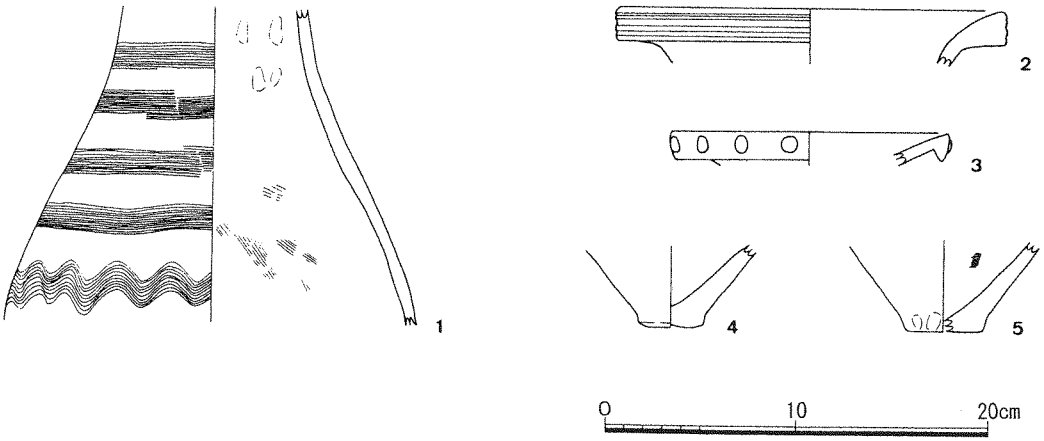


No.87



1　2.5Y5/3 黄褐色砂質土（Mn 少し沈着）
2　10YR4/1 褐灰色礫混砂質土（2～5 cm大の礫、盛土）
3　10YR4/4 褐色礫混砂質土（2～5 cm大の礫、地山）

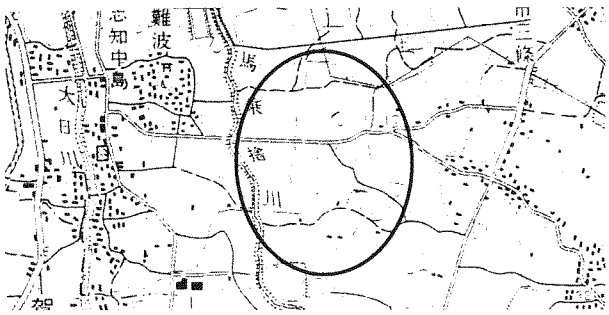
調査区平面・層序図



出土遺物（1　No.80　3 層、2～5　No.87　2 層）

木戸原遺跡　－２・３次調査－

所 在 地　市三條～志知中島字木戸原外
事 業 名　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　定松佳重・的崎薫・坂口弘貢・谷口梢
種　　別　本発掘調査
調査期間　平成17年８月１日～平成18年２月27日
調査面積　5,890㎡



調査の位置

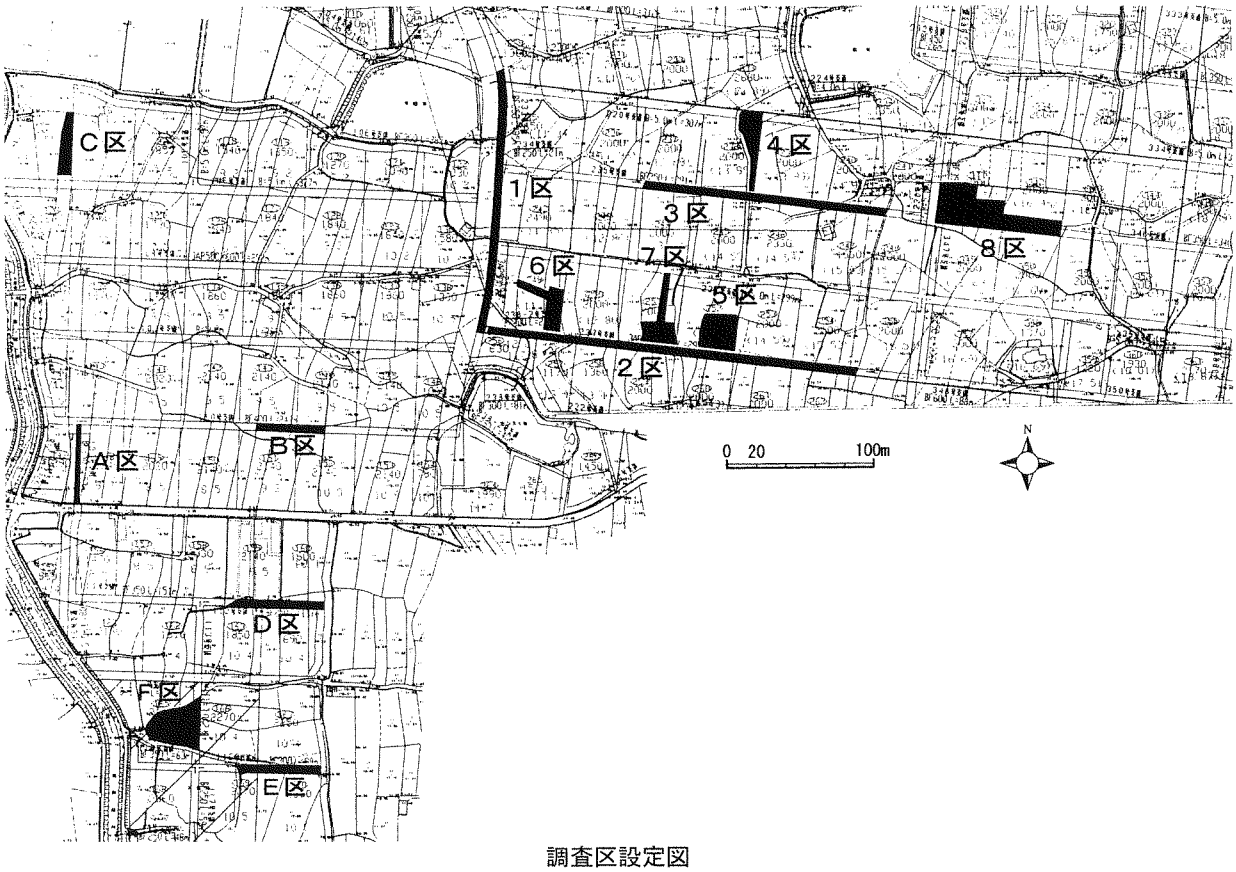
1　調査内容

本調査対象地は三原平野西～中央部の扇状地上に位置し、標高6.2～17.0ｍを測る田園地帯である。

上記事業に伴って行った遺跡範囲確認調査で弥生時代中期～中世の遺構・遺物を確認した。基本的には設計変更による地下保存であるが、変更不可能な個所については本発掘調査を行い、記録保存することとなった。

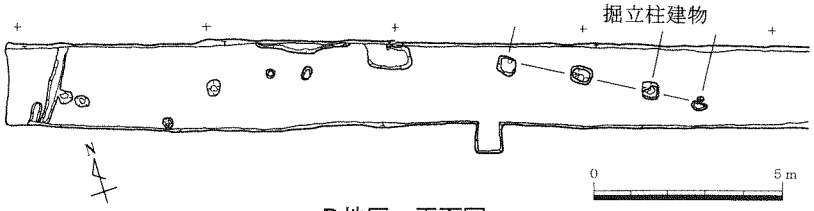
【Ｂ地区】

掘立柱建物を構成する柱穴を４基確認した。柱間は1.9～2.0ｍである。幅２ｍの調査区のため全体像

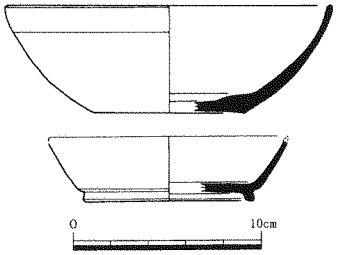


調査区設定図

は不明であるが、東に庇を持ち北東に続く建物と考えられる。8世紀代の須恵器・土師器が出土している。遺物包含層からは須恵器や製塩土器片（丸底Ⅲ式）が出土している。



B地区　平面図

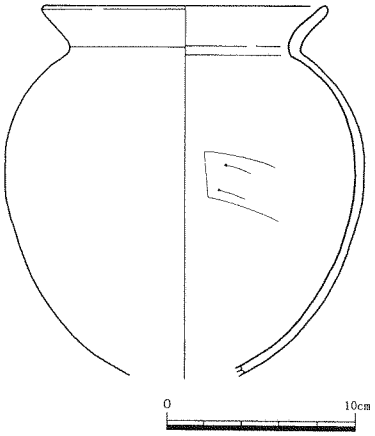


B地区　包含層出土

【E地区】

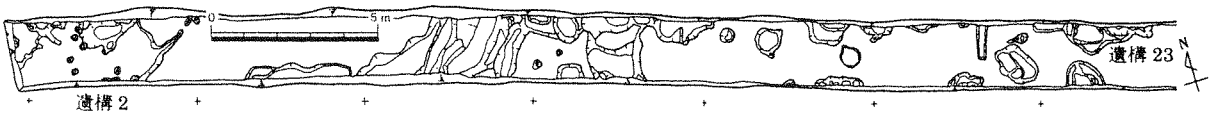
黄色系粘質土をベースに溝や柱穴などの遺構が掘り込まれる。遺構は古墳時代と古代の2時期ある。

調査区の東半には大型の柱穴が見られ、おそらく建物を構成している柱穴と考えられるが、調査幅が狭いため詳細は不明である。遺物は土師器甕などが見られ、須恵器は出土していない。古墳時代前期と思われる。遺構2は古代の遺構であり、製塩土器や土師器・須恵器などが含まれる。



E地区　遺構23

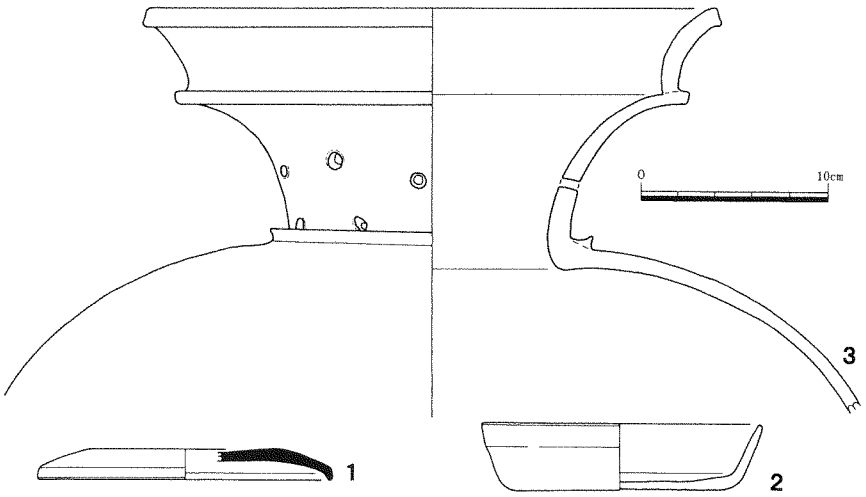
E地区　遺構2



E地区　平面図

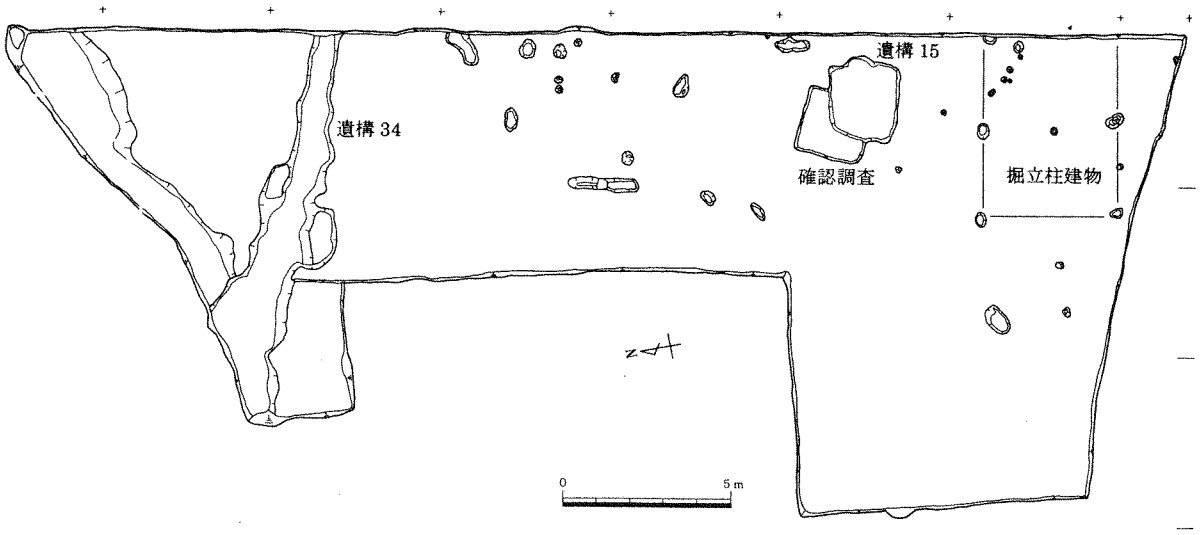
【F地区】

礫混灰黄褐色～褐灰色砂質土をベースにして遺構が掘り込まれる。調査区の南側には1×2間以上の掘立柱建物が見られ、調査区の東側へと続く可能性がある。掘立柱建物は桁行が4.0m、梁行が2.7mである。それに平行する遺構15は東側にやや張り出しをもつ1辺約2.0mの方形の竪穴状遺



F地区　1・2　遺構15　3　遺構34

構である。柱穴は無く、ほぼ平坦な床面であったが炭層を確認している。作業場的な遺構である可能性が考えられる。この遺構から8世紀前半の須恵器坏や土師器坏が出土している。遺構34は幅約0.8～2.0mの東西に走る溝で、弥生時代後期の土器が多く含まれる。周辺にこの時期の集落が広がっている可能性が考えられる。



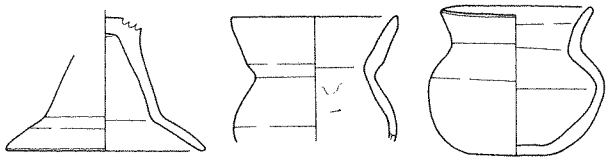
F地区　平面図

【1区】

大きく3つの微高地からなる。遺構はほとんどが自然流路であるが人為的流路の可能性があるものもあり、古墳時代中期の土器が出土する。調査区南部には性格不明の小土坑群を確認しており、古墳時代中期の土師器が出土している。結晶片岩を含む胎土の土器片も確認しており、紀伊もしくは阿波地域との交流を示す。また、南部では中世と思われる土器片が出土している。

【2区】

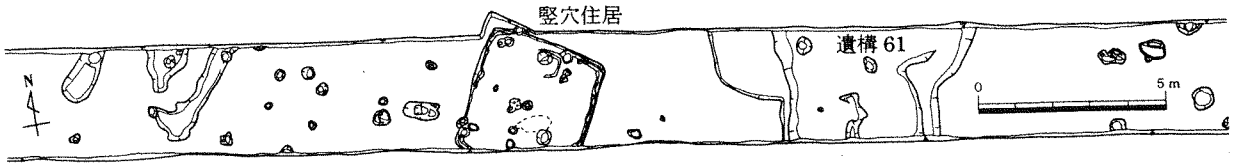
調査区西部で幅15mを測る大溝（遺構27）を確認した。稜の直径がかなり縮小化された高坏が出土しており、古墳時代中期と考えられる。南西方向に流れていく。中央東寄りでは3.2×3.5（推定）mの方形竪穴住居を検出した。主柱穴は不明で、中央土坑や竈跡は確認できていない。遺構の時期は内側への肥厚が明瞭な布留形甕の口縁が出土しており、古墳時代前期と思われる。その他の遺構は自然流路と小土坑であり、竪穴住居と同時期と考えられる。遺構61からはミニチュア土器（椀）が出土している。遺物包含層からは須恵器などの中世遺物が出土しているが調査区内では遺構を確認しておらず、周辺に中世遺構の埋没が推定される。



2区　遺構27

0　10cm

2区　平面図

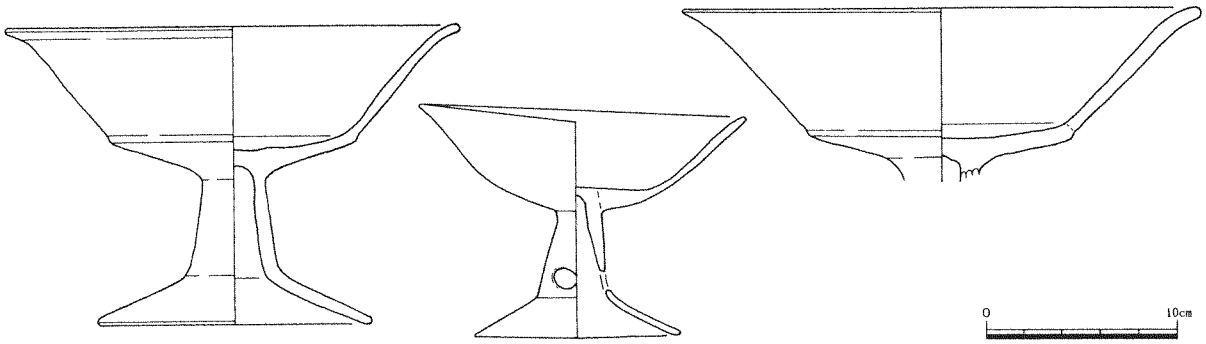


【４区】

人力掘削中に祭祀遺物である有孔円板や臼玉といった滑石製品を確認したため、部分的ではあるが１ｍブロック毎に分け、ふるいによる土の精査を行っている。また主要な遺構の埋土についても精査を行っている。

主な遺構として竪穴住居３棟、掘立柱建物５棟、落ち状遺構４基、柵列１列、溝などを確認している。

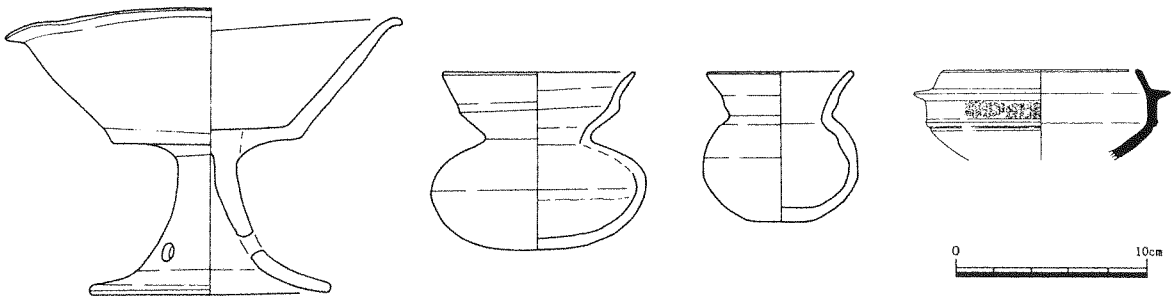
竪穴住居１は4.1×3.3ｍのやや長方形の竪穴住居で、主柱穴は不明である。周溝は曖昧であり、部分的に見られる程度である。ここから臼玉69・管玉９・勾玉５点の石製品が出土している。勾玉は超小型品であり、全て１㎝以下である。管玉は滑石製ではないものが１点含まれている。その他に鉄製刀子・土師器が出土しているが、須恵器は確認していない。鉄製刀子は茎部が欠損している可能性はあるが、全長6.9㎝で刀身長5.2㎝である。土師器は器形のわかるものがほとんどで、高坏が非常に多い。稜はかなり下部に下がった有稜高坏であり、時期は古墳時代中期と思われる。土師器はそのほとんどが床面より浮いた状態で出土している。滑石製品も同様の出土状態であることから、住居廃絶後の窪みを利用して祭祀が行われていたと考えられる。



竪穴住居１

竪穴住居２は方形の竪穴住居の一部であるが、上部は削平され周溝のみ残る。埋土から臼玉１点が出土している。

竪穴住居３も方形の竪穴住居の一部であるが、上部の大半が削平され、わずかに残るのみである。土師器がまとまって出土し、韓式系土器（甕）も含まれる。在地の土で作られているが、技法・器形などから製作は在地人ではなく渡来人の手によるものと考えられる。出土地点は離れているが、確認調査時（№135）にもほぼ完形の韓式系土器が出土しており、胎土・技法は同じである。韓式系土器は遺物包含層からも数点出土しているが、遺構出土は竪穴住居３のみである。埋土からは臼玉２点が出土している。北壁の断面の周溝部分からＴＫ73の須恵器有蓋高坏の坏部を確認している。



竪穴住居３

掘立柱建物１は梁行２間で、１間の距離が2.1mである。桁行は調査区東側へと続くためその規模は不明である。柱穴は大型で楕円形を呈している。柱穴である遺構56・64・78の埋土を精査したところ、臼玉が２・１・２点出土している。

掘立柱建物２は梁行２間・桁行４間以上の大型建物であり、東側へと続いている。梁行は１間が3.7～4.2m、桁行は南側が2.1mと等間隔であるが、北側は1.1～2.4mと等間隔でない。

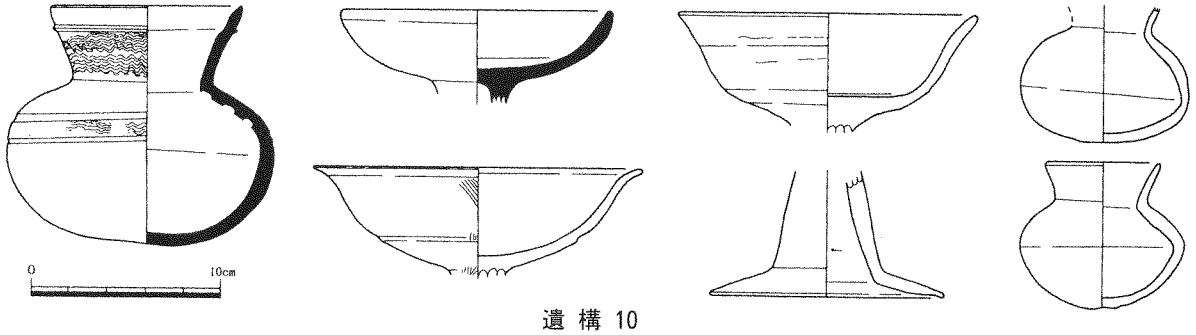
掘立柱建物３は梁行３間以上・桁行３間以上の大型建物であり、東と北に伸びていく。１間は2.3mである。

掘立柱建物４は梁行２間・桁行３間の大型建物である。梁行は１間が4.5mで桁行が2.8mである。２本の屋内棟持柱を備えている。この建物の柱穴埋土の精査を行っているが、臼玉は出土していない。

掘立柱建物５は梁行３間以上・桁行３間以上の大型建物であり、北と西側へ続く。梁行、桁行ともに2.2～2.5mの柱間である。２本の屋内棟持柱を備えている。

遺構６・７・８は溝である。遺構６・７の両者から合わせて臼玉45・有孔円板３・勾玉１点が出土している。遺構８からは臼玉４・管玉１点が出土している。

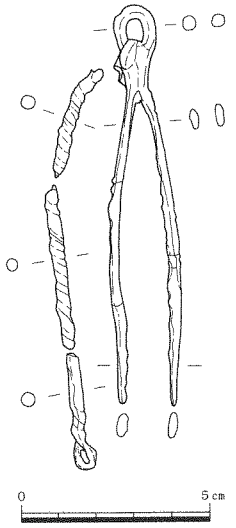
遺構10は落ち状の土坑であるが、断面観察からやや上部から掘り込まれているものと考えられる。臼玉222・剣形１・有孔円板12・管玉４点や土師器・須恵器・鉄鋌などが出土している。滑石製品は中層からまとまって出土が見られる。剣形品は鎬のない扁平なタイプで、２片に割れて出土している。有孔円板は12点のうち10点が双孔で、２点が単孔である。また、双孔の中でも６点については、石質や製作



遺構 10

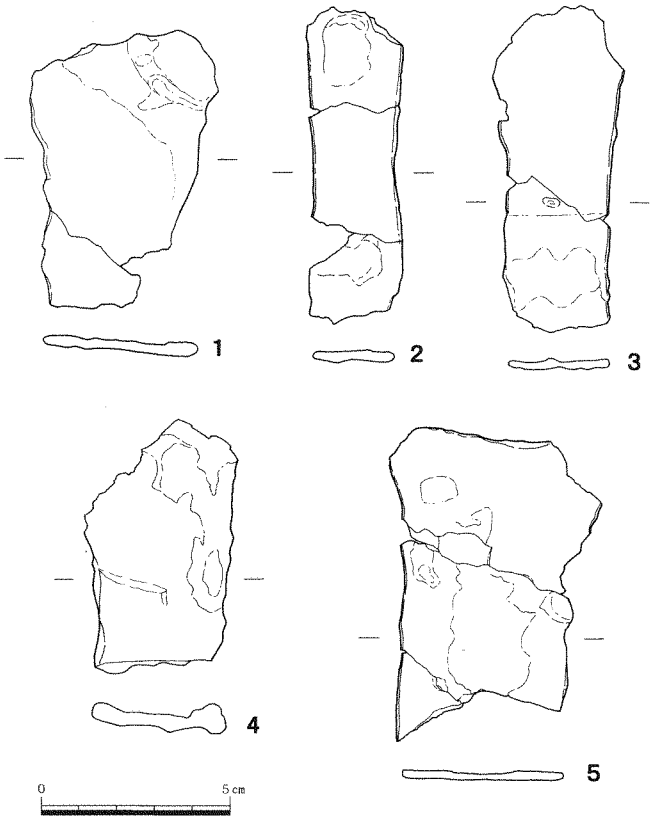
技法・形態が似ているため同じ工房内で生産された可能性が高い。須恵器は上層から２点出土している。鉄鋌は約６点あるが、古墳から出土するような大型の鉄鋌ではなく、小型で薄い。また、埋土には炭が多く混じっていることから祭祀には火を利用していた可能性が考えられる。

遺構11は毛抜き形鉄製品と臼玉が３点出土している浅い落ち状の土坑である。毛抜き形鉄製品は長さ10.7cmで、頭部円環部には針金をねじり、先が環状になった連結金具が付く。毛抜き形鉄製品の使用方法の１つとして、刀子の鞘に取り付けて腰に下げるための佩用金具と考えられている。この毛抜き形鉄製品と共伴はしていないが刀子も近辺から出土していることから、今回出土の製品も佩用金具と考えられる。５世紀代のもので、集落から出土するのは珍しい。

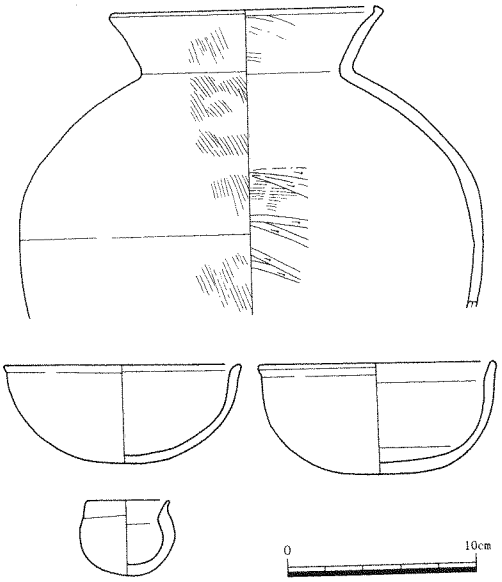


毛抜き形鉄製品

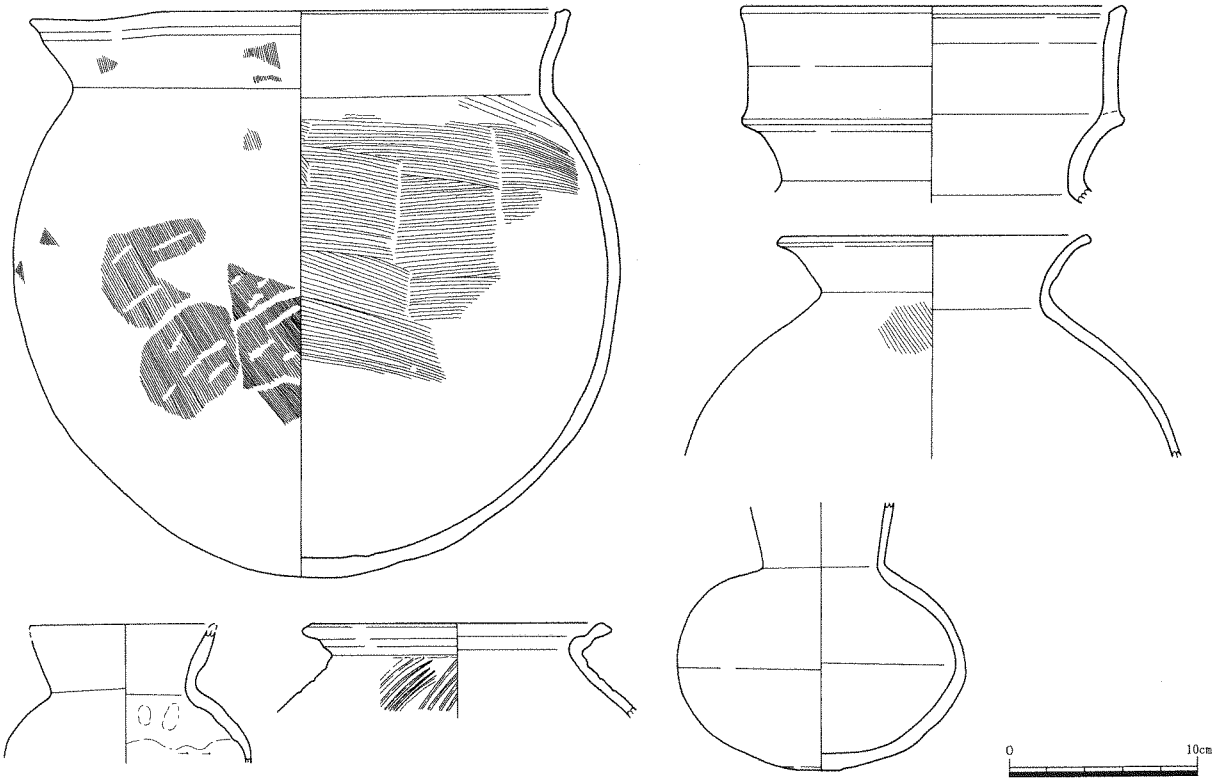
遺構15は落ち状の土坑であり、臼玉82・勾玉１・剣形１・有孔円板２・ガラス玉１点と多くの土師器が出土し、須恵器の甕が上層から１点出土している。また



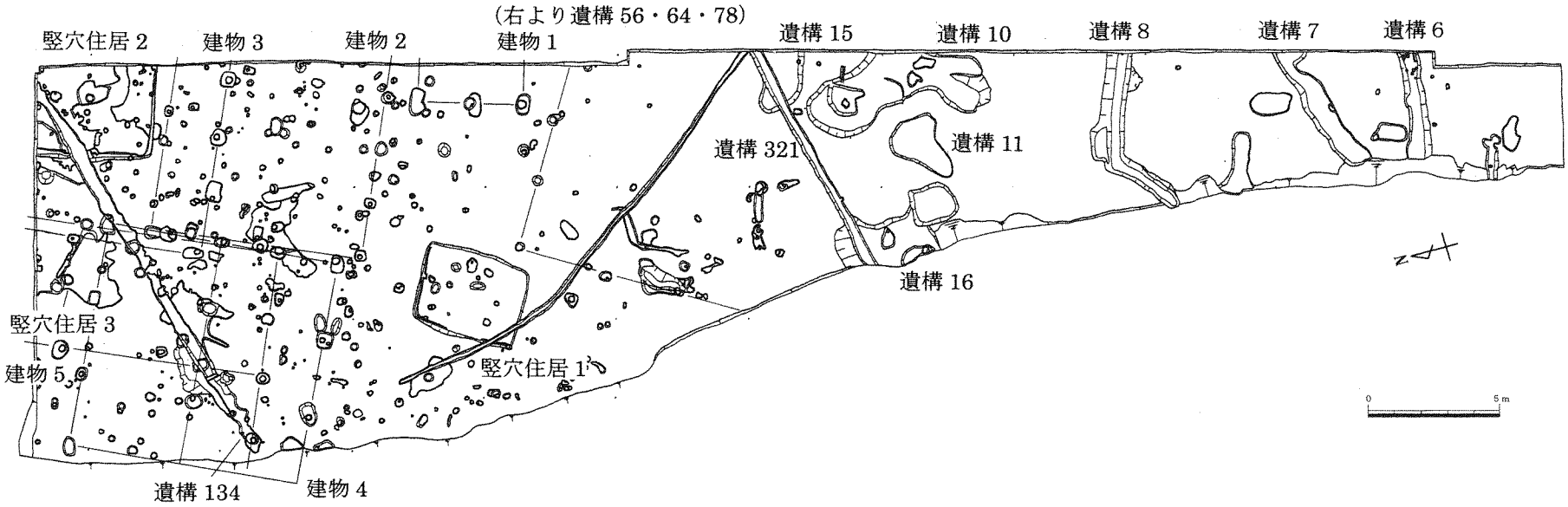
出土した鉄鏃　1～4　遺構10　5　遺構16



遺 構 15



遺 構 16


竪穴住居 2
建物 3
建物 2
(右より遺構 56・64・78)
建物 1
遺構 15
遺構 10
遺構 8
遺構 7
遺構 6
遺構 321
遺構 11
遺構 16
竪穴住居 3
建物 5
竪穴住居 1
遺構 134
建物 4
0
5 m

4 区　平面図

土師器の中にはミニチュア土器も含まれている。勾玉は１㎝以下の小型品であり、剣形品は断面形が三角形を呈する片面鎬のもので、全長3.5㎝を測る。ガラス玉の色はコバルトブルーである。

遺構16も落ち状の土坑であり、土師器や鉄鋌、臼玉86・勾玉１・有孔円板１・管玉１点が出土している。土師器の中には二重口縁壷や東海系のＳ字状口縁台付甕終末段階のものが含まれる。また土師器甕の横から勾玉と臼玉がまとまって出土している。臼玉はやや小さめで大きさが揃っていることから、１度の祭祀によって使用された可能性が考えられる。埋土には炭が含まれている。

遺構134・321は同方向に流れる溝で古墳時代の遺構を切っている。遺構134からは回転ヘラ切りの土師器皿が出土し、古代の遺構と考えられる。

包含層から臼玉183・勾玉１・有孔円板６点の玉類が出土している。出土した玉類は文末に一覧表でまとめてあるが、包含層出土の中には遺構上層部分を掘り下げすぎたものも多く含まれている。実際、遺構10と遺構15の上部の包含層には臼玉が大量に含まれ、その数142点となる。包含層や遺構埋土を全て精査していないため推測ではあるが臼玉は４区全体に密度は違えど散在していたと考えられる。しかし、大きく見て４区南半の包含層や遺構には臼玉以外の滑石製品も多く含まれていたことがいえる。包含層から出土した勾玉は全長3.0㎝、重量5.5ｇであり、この調査区では唯一滑石ではない暗緑色の石材である。白緑色の縞が見られることから石材が均質ではなく、碧玉ほどの重量感もない。有孔円板の中には円形ではなく、不定形有孔石製品といわれる自然面を多く残す剥片に穿孔を施したものが１点含まれている。

鉄製品もまた、精査を行った区から多く出土しているが、遺構からの出土を見ると遺構10・16・竪穴住居１から集中している。特に鉄鋌は遺構10・16からのみ出土しており、臼玉・勾玉などの滑石製祭祀遺物の出土地点と重なる。おそらく、４区南半、もしくはその東側は祭祀場としての空間であり、祭祀遺物が大量に出土するものと推測する。

【５区】

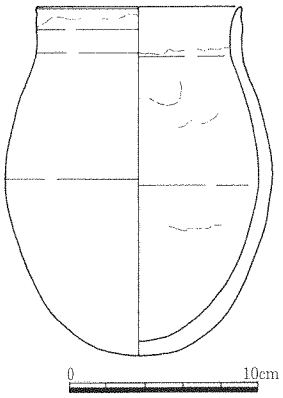
調査区の北西部には古墳時代の遺物が多く含まれる包含層が堆積していたことから、部分的に埋土を精査した結果、滑石製品が含まれていることがわかった。遺構134を境として北西部分を人力で掘削し、精査を行っている。この包含層から土師器とわずかな須恵器、臼玉58・勾玉３点が出土している。土師器の中には移動式竈片も含まれている。

掘立柱建物と竪穴住居を各１棟確認したが、この２棟は重複しているため２時期は確実である。掘立柱建物は梁行３・桁行北西３間・南東４間の建物である。１間の長さは梁行が2.0m、北西面の桁行は2.2m、南東面は1.6～2.0mである。遺構262・267で臼玉各１点を確認している。

竪穴住居は方形で掘立柱建物と同方向であり、４本の主柱穴と２辺の周溝がわずかに残っているだけで、その規模は不明である。主柱穴の１つである遺構188から臼玉１点を確認している。

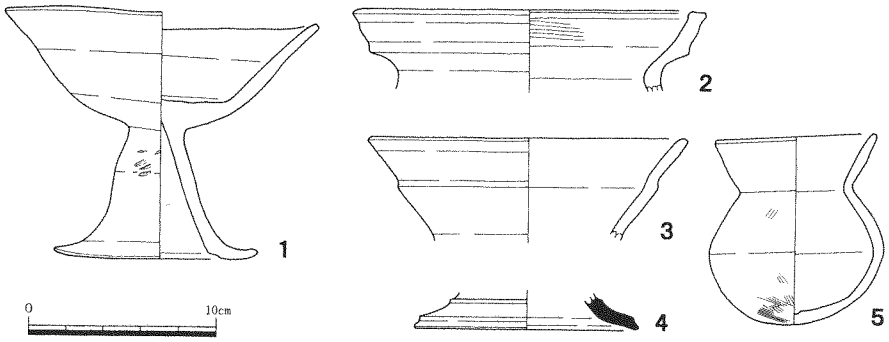
遺構134は掘立柱建物と竪穴住居の北西側に同方向に走る溝であり、臼玉８・勾玉１・管玉１点が出土している。どちらか、もしくは両者に付随する溝と考えられる。

遺構325は遺構検出面より上層部分で多くの土師器が出土し、韓式系土器なども含まれている。おそらく上部より遺構が掘り込まれているものと考えられる。最下層の埋土を精査した結果、臼玉３・勾玉１点が出土している。



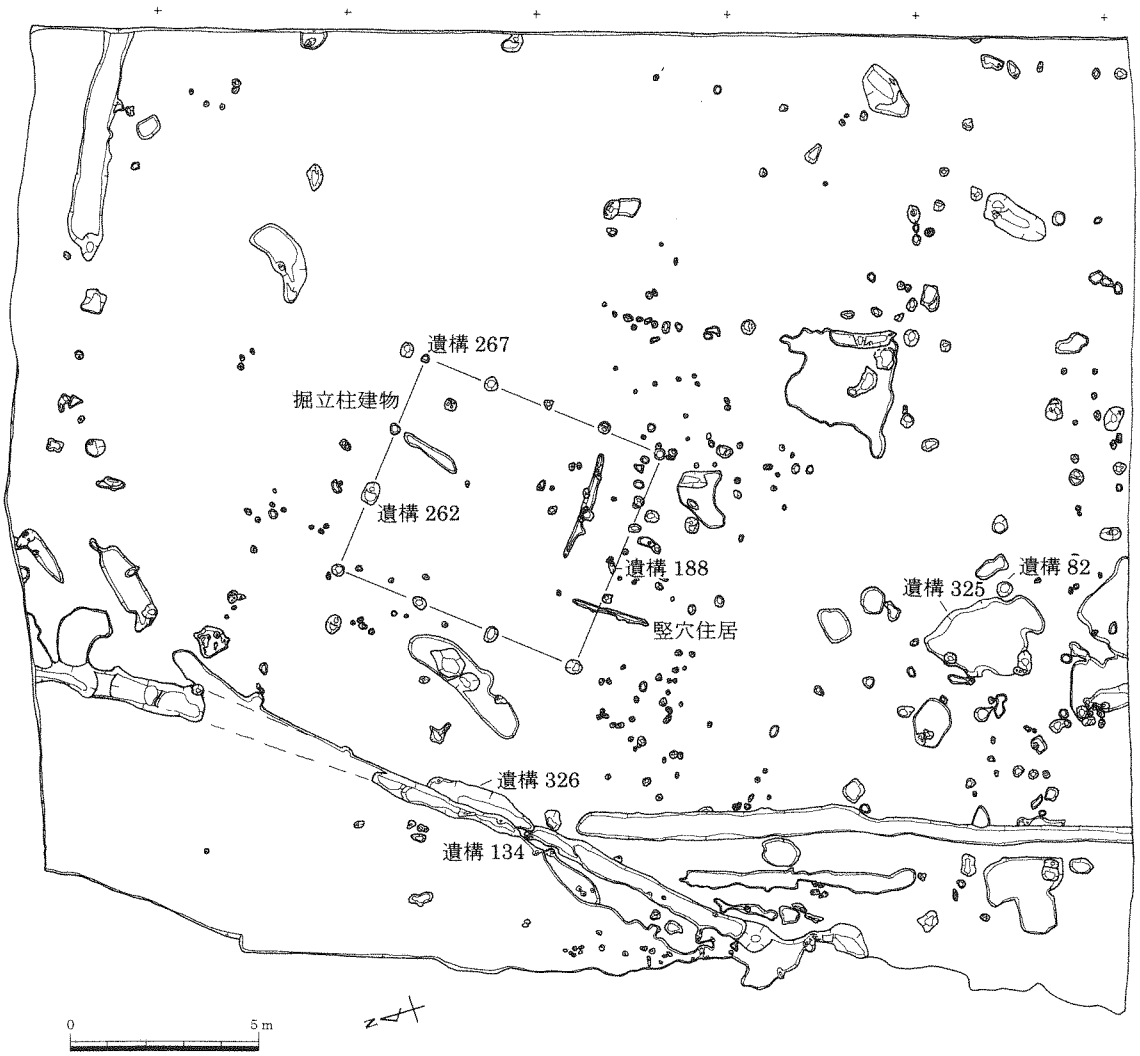
包含層出土の韓式系土器

包含層から韓式系土器１点と管玉未製品・勾玉各１点が出土している。この勾玉は滑石ではなく、表面は粒子の細かい砂岩のようでもあるが石材の種類は不明ある。丸みのあるタイプで出土勾玉中最大の全長3.2cmを測る。



1　遺構82
2～4　遺構134
5　遺構325

5区　出土土器



5区　平面図

【6区】

調査区南端部で幅６m以上の溝（遺構１）を検出した。この溝は２区で確認している遺構27の続きと

なる。古墳時代の遺物が出土しており、胎土に結晶片岩を含むものも見られる。中～下層にかけて埋土の精査を行うが、滑石製品は確認していない。遺構28は調査区を東西に流れる幅30～40cmの溝である。流水の痕跡は見られず、１度掘り直しがされている。遺構１と同時期の古墳時代の土器が出土している。

【８区】

遺構39は幅約12mの中世の溝である。この溝より東側においては弥生Ⅳ様式の遺物が含まれる遺構が多く、遺構19や26ではややまとまってこの時期の遺物が出土している。遺構39より西側では室町時代の遺構が多い。

掘立柱建物を１棟確認している。梁行２間・桁行４間の建物で、梁行が１間1.6m、桁行が１間1.3～2.0mである。この建物の柱穴である遺構84からは土師質の鍋が出土し、15世紀代と考えられる。遺構100からは東播系須恵器捏鉢・須恵器甕が、遺構101からは東播系須恵器捏鉢や青磁碗・土師器が出土している。調査区の西端の遺構117はＬ字状の溝で、わずかな土師質土器が出土しているだけであるが、古墳時代の遺構である可能性が考えられる。

２　まとめ

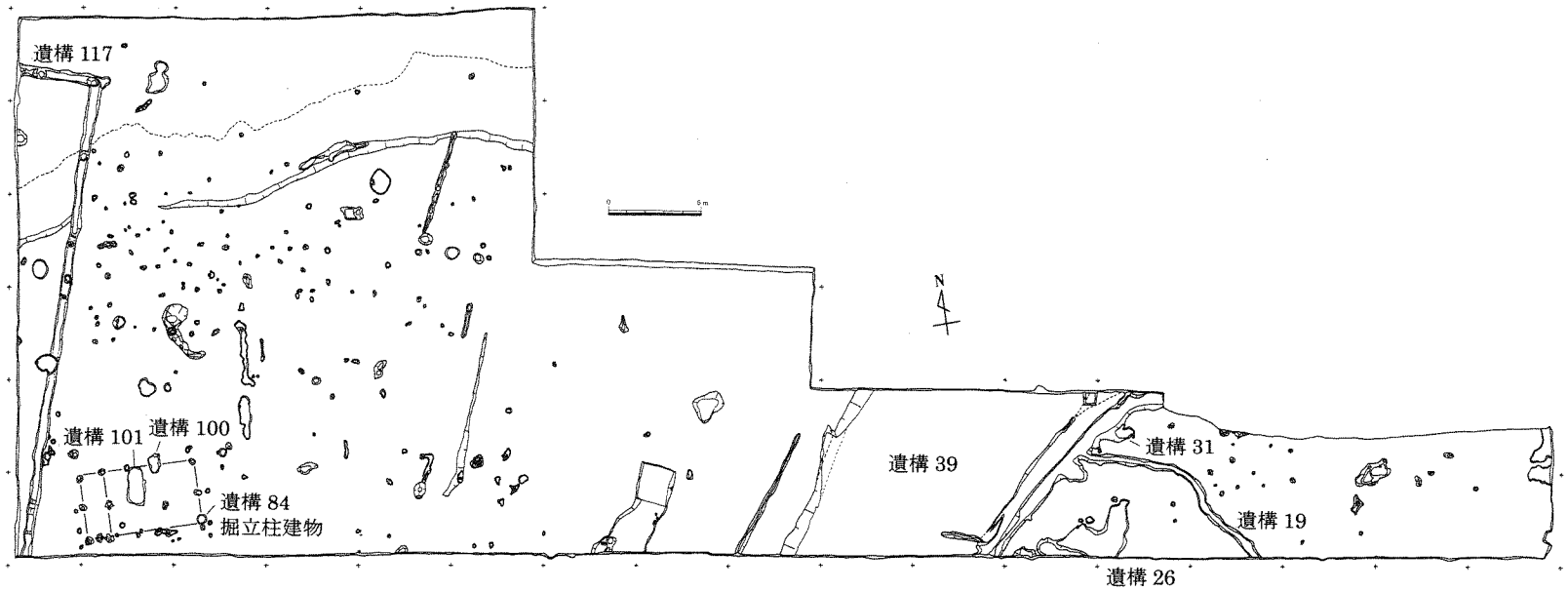
今回の調査で主に弥生時代・古墳時代・律令期・中世の遺構・遺物を確認した。中でも古墳時代の遺構は広範囲に広がっていることがわかった。特に４区においては、大型掘立柱建物群や滑石製品・鉄器・韓式系土器など特殊な遺物が出土していることから、三原平野での中心的な場所であり、豪族居館の可能性も考えられる。５区でも滑石製品などが出土しているが、遺構の密度や、建物構成などからいっても中心は４区の北・東・西側に広がっていると考えられる。

石製品は、４区から臼玉707・勾玉９・剣形２・有孔円板25・管玉15点が出土し、県下でも最大級の出土量である。勾玉はすべて丸みをもつタイプであり、９点中７点が１cm以下の小型品であることが特徴である。有孔円板について観察すると、遺構出土のものより包含層出土のものの方が古い傾向にある。包含層出土のものは厚みがあって、ほぼ正円形、中央寄りに２孔穿たれているのに対し、遺構からは薄手で楕円形、両端穿孔のものが目立つ。これが逆転層位であるならば、おそらく調査区の東側に包含層に含まれるようなやや古い時期の遺構が存在すると考えられる。

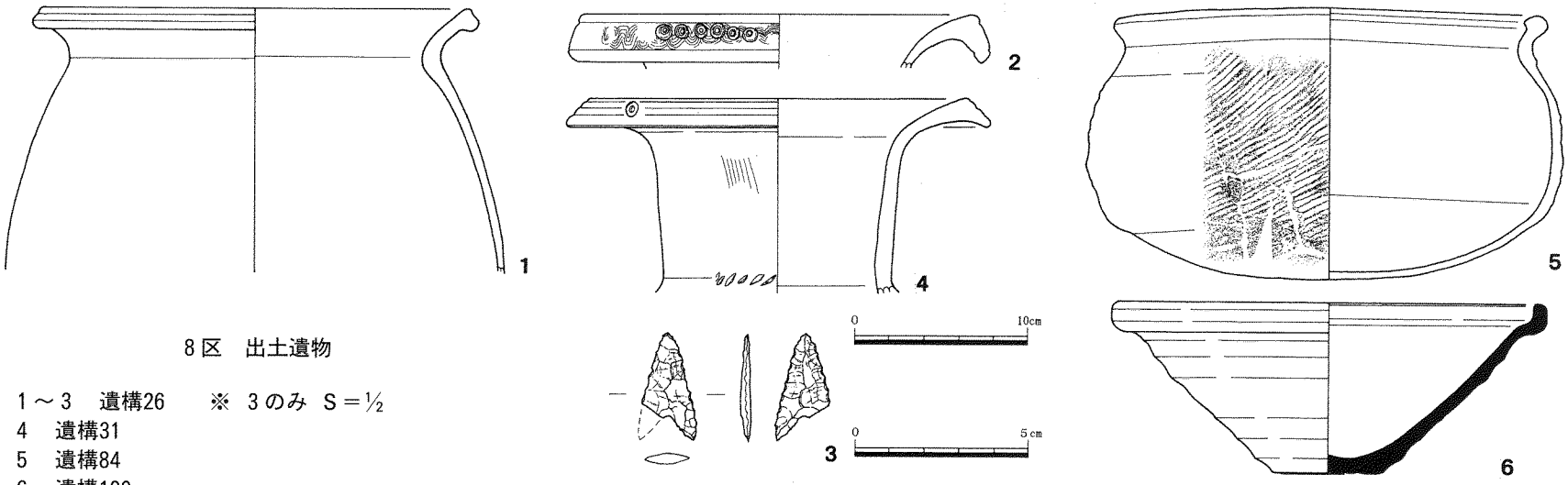
石製品の生産については、４区では未製品が全く出土していないが、５区からは管玉の未製品が１点出土していることから、遺跡内で玉類が生産されていた可能性が考えられる。今後の調査において、工房や生産域が確認される可能性がある。

鉄鋌は淡路島内初の出土で、滑石製品と鉄鋌が副葬を目的とした古墳以外から共伴して出土する例は全国的にも稀である。祭祀遺物である滑石製品との共伴は、本来鉄素材である鉄鋌も祭祀道具として使用されたことを物語っている。鍛冶行為に伴い祭祀を行う例もあり、鉄鋌はそれに伴うものとも考えられたが、当遺跡からは鍛冶関連遺物はほとんど出土しておらず、鍛冶行為に伴う祭祀ではないと判断できる。

毛抜き形鉄製品は遺構11の上層で出土し、祭祀との関係性を考えたが、臼玉の出土がわずかであることから遺構11は祭祀遺物奉納坑とは考えがたく、毛抜き形鉄製品と祭祀の関係性は薄いと思われる。しかし毛抜き形鉄製品の丁寧な置き方から、遺構11埋没後でも周辺は祭祀域とみなされていたと考えられる。



8区　平面図



8区　出土遺物

1～3　遺構26　　※ 3のみ S＝½
4　遺構31
5　遺構84
6　遺構100

当遺跡は倭の五王の時代に併行する時期の遺跡であり、『古事記』や『日本書紀』には淡路島の記載が多く見られることから重要な土地であったことが窺える。鉄素材や威信財など諸説ある鉄鋌は、大和王権が掌握し、諸国に分与していたとされることや、渡来人の往来にも大和王権の関与が大きいとされていることから、木戸原遺跡と大和王権には密接なつながりがあったと思われる。大陸渡航の経由航路である瀬戸内海において、畿内の玄関口とも言える淡路島は、大和王権にとって非常に重要であり、当遺跡の祭祀はこのような大陸への海上路に伴った拠点祭祀の可能性も考えられる。　（定松・的崎）

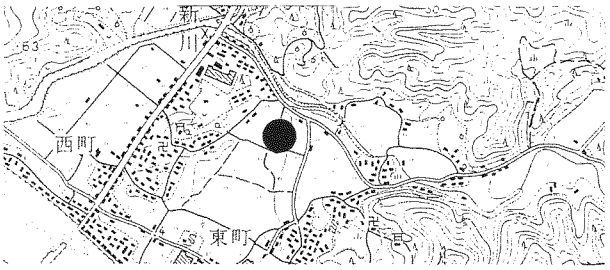
4　区	臼　玉	勾　玉	剣　形	有孔円板	管　玉	ガラス玉
包　含　層	183	1		6		
遺　構 6・7	45	1		3		
遺　構　8	4				1	
遺　構　10	222		1	12	4	
遺　構　11	3					
遺　構　15	82	1	1	2		1
遺　構　16	86	1		1	1	
遺　構　56	2					
遺　構　64	1					
遺　構　78	2					
遺　構　321	2					
竪穴住居 1	69	5			9	
竪穴住居 2	1					
竪穴住居 3	2					
表　　採	3			1		
合　　計	707	9	2	25	15	1

5　区	臼　玉	勾　玉	剣　形	有孔円板	管　玉	管玉未製品
包　含　層	64	4				1
遺　構 134	8	1			1	
遺　構 188	1					
遺　構 262	1					
遺　構 267	1					
遺　構 325	3	1				
遺　構 326	1					
合　　計	79	6	0	0	1	1

4区・5区　玉類一覧表

九蔵（ぐぞう）遺跡　－１次調査－

所 在 地　　阿万東町字九蔵外
事 業 名　　基盤整備促進事業
担 当 者　　山崎裕司
種　　別　　確認調査
調査期間　　平成17年10月13日～11月16日
調査面積　　204㎡（51ヶ所）



調査の位置

1　調査内容

調査地は南あわじ市の最南端に位置し、周辺には鴨路川が形成した三角州地形が広がる。現在、鴨路川は本庄川に合流するが、それ以前は調査地西側の山裾に沿って海へ流れ込んでいたと伝えられる。調査地北側には弥生時代中期・平安～中世の北田遺跡、南東側には古墳～平安時代のみのこし遺跡が立地する。平成15年度に分布調査を行い、その結果を受けて確認調査を行うことになった。

No.７・15・16・17・29・30・31・32・37・42・45・50で埋蔵文化財の包蔵を確認した。No.７・42を遺跡範囲Ａ、No.15・16・17・37を遺跡範囲Ｂ、No.29・30・31・32・45・50を遺跡範囲Ｃとして、各範囲別に概要を述べていくことにする。

遺跡範囲Ａは鴨路川の河岸段丘上に広がる。No.７・42では、柱穴等の遺構が検出された。周辺の調査区では遺構面や包含層は確認できなかったことから、遺跡の広がりは極めて小さいと推定される。No.42の遺構埋土からは底部回転糸切の土師器小皿（２）等、No.７の包含層（３層）からは瓦器椀（１～４）・白磁碗（５）・須恵器壷（７）等が出土しており、12世紀後半～13世紀前半に納まる。

遺跡範囲Ｂは東側の山から舌状に張り出す微高地の先端付近に広がる。No.15の３層・16の３層・17の４層は８～９世紀頃の遺物を多く含む包含層で、特にNo.16は包含層が厚く、出土遺物が多いことから、周辺の微高地の尾根筋付近が律令期の中心的な場所と思われる。出土遺物は製塩土器が大半を占め、周辺で製塩が行われていたことは確実である。

No.17では遺構が検出されたが、上述の４層上面が遺構面となっていることから、古代の遺構ではない。埋土から中世以降と思われる。

No.37の２層からは古墳時代の高坏（２）と直口壷（１）と思われる土器片等が出土している。

遺跡範囲Ｃは東側の山から舌状に張り出す微高地上に広がる。No.30・31では表土直下で柱穴等の遺構が多数検出された。No.31の遺構１からは土師器皿・小皿（４～10）や白磁皿（２・３）等、12世紀後半～13世紀前半の遺物が多数出土している。遺構４・５やNo.30の遺構３出土遺物も同時期と思われる。

No.45は切り合いを確認することはできなかったが、方形の竪穴住居や土坑等が重なり合っていると思われる。堆積層からは縄文時代晩期（１）と弥生時代前期（２）の遺物が出土している。湧水が激しい為に遺構を完掘することはできなかったが、弥生時代前期の土器の胎土に近い細片が出土している。No.29の遺構も詳しい時期はわからないが、堆積層から弥生時代前期頃と思われる土器片が出土した。

No.30・31と29・45では上述のような時期的な違いがあり、地形的にも前者が微高地の尾根筋近く、後者が微高地周辺の低い段丘地形を残す付近に位置し、湧水が激しい。

2　まとめ

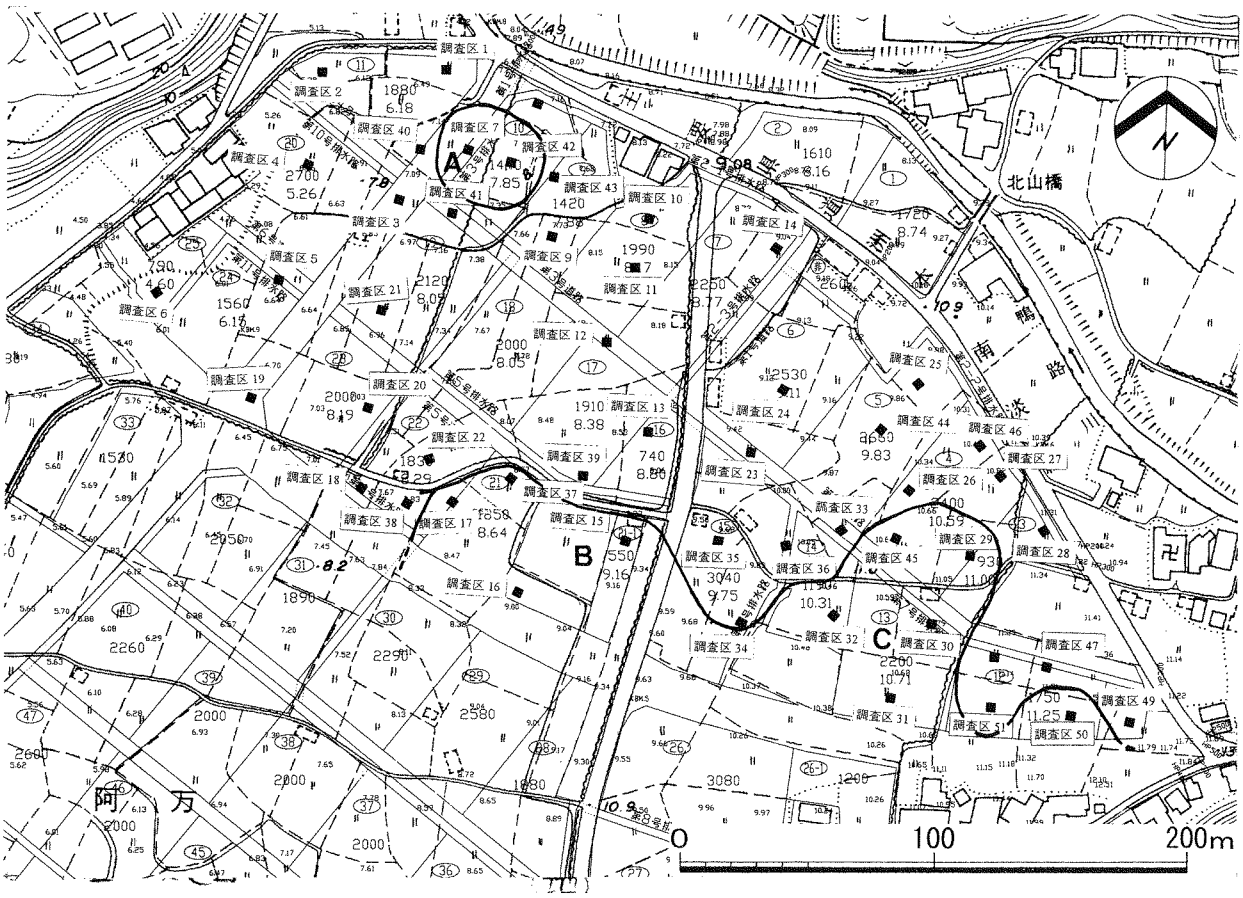
現在は低平な三角州地形のような景観を呈しているが、古代以前はもっと凹凸の激しい地形であったようである。遺跡の中心となるのは東側の山の尾根筋の延長となる微高地で、ここに遺跡範囲Ｂ・Ｃが立地する。

範囲ＢとＣでは中心となる時代がやや違うようで、範囲Ｂは奈良～平安時代初め頃の中心的な場所と推定され、尾根筋に近い場所を中心に広がっていると推定される。範囲Ｂの低い段丘を形成する微高地の周辺では、古墳時代の包含層や中世と思われる遺構も確認できた。範囲Ｃは平安時代末～鎌倉時代初め頃の中心的な場所と推定され、尾根筋に近い場所を中心に広がっていると推定される。範囲Ｃの低い段丘を形成する微高地の周辺では、縄文時代晩期・弥生時代前期の遺構・包含層が確認できた。

上述の微高地の北側では、範囲Ａで鎌倉時代初め頃の遺構を確認したが、古代以前の遺構は全く確認できなかった。また下層に厚い粘質土が堆積し、上層に古代～中世の遺物を含む客土層が見られる調査区が多く見られた。古代以前、微高地北側は低湿地等の不安定な場所で、中世以降、凸地を削り、凹地を埋めることによって次第に耕地化が進み、現在のような凹凸の少ない地形へと変わっていったと推定される。

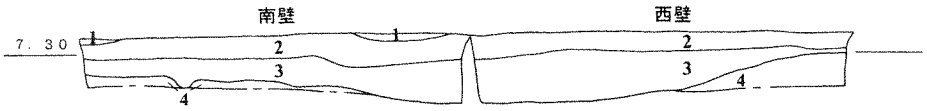
また№34・49・50では砂礫層が検出されたことから、鴨路川の旧河道であった可能性もある。鴨路川が微高地に近い位置に流れ、微高地が鴨路川によって分断されていた時期もあったと推定される。

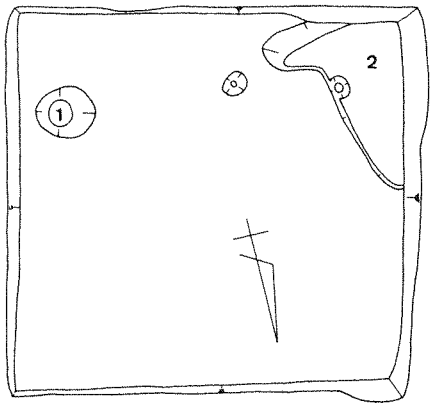
（山崎）



調査区設定図

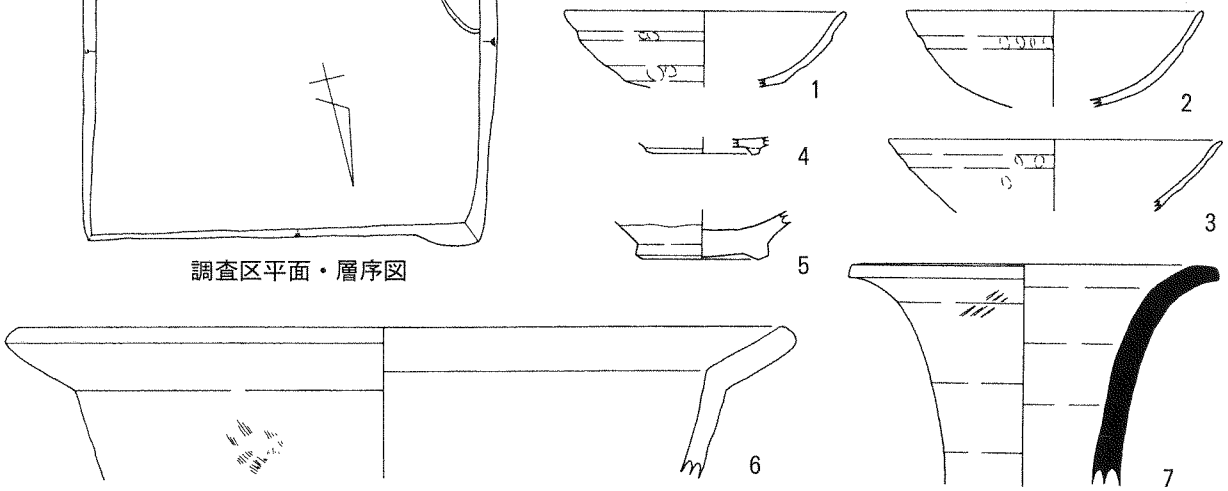
No. 7





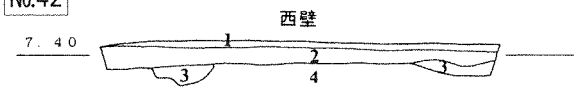
調査区平面・層序図

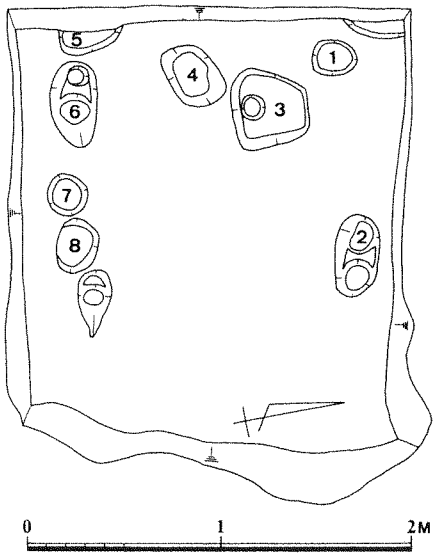
1　2.5Y6/1 黄灰色砂質土（耕土）
2　2.5Y5/3 黄褐色砂質土（Fe 少し沈着）
3　10YR4/1 褐灰色粘砂質土（遺物・炭多く含む）
4　10YR5/6 黄褐色粘砂質土（Fe 少し沈着、地山）



出土遺物（6　遺構 1）

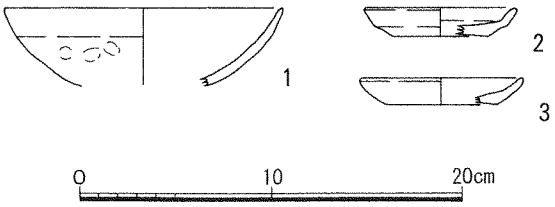
No.42





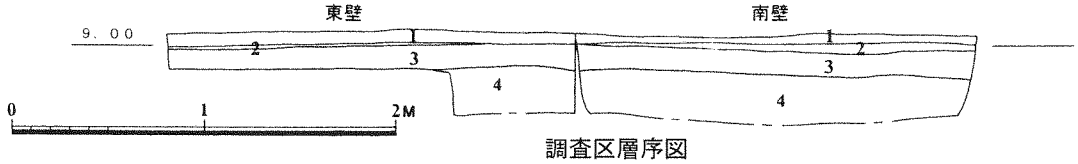
調査区平面・層序図

1　10YR6/1 褐灰色砂質土（床土）
2　2.5Y7/1 灰白色砂質土と 2.5Y6/6 明黄褐色砂質土撹乱状に混じる（床土）
3　10YR4/1 褐灰色粘砂質土（Mn 少し沈着）
4　2.5Y6/6 明黄褐色粘砂質土（Mn・Fe 沈着、地山）



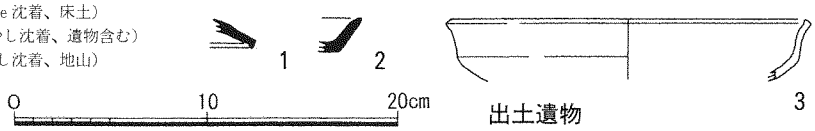
出土遺物（1　遺構 6、2　遺構 4）

No.15



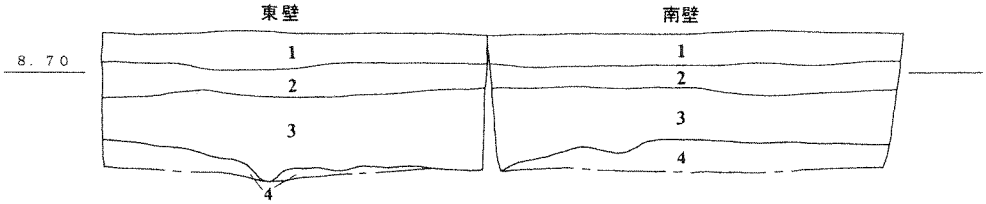
調査区層序図

1　2.5Y6/1 黄灰色砂質土（耕土）
2　10YR6/8 明黄褐色粘砂質土（Fe 沈着、床土）
3　10YR3/1 黒褐色粘質土（Mn 少し沈着、遺物含む）
4　2.5Y5/4 黄褐色粘質土（Mn 少し沈着、地山）



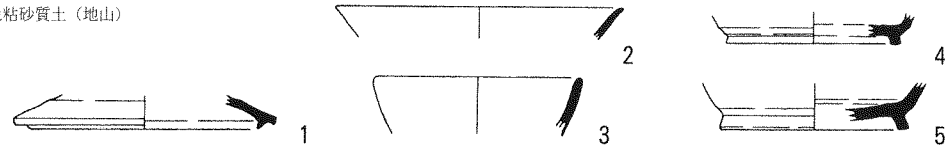
出土遺物

No.16



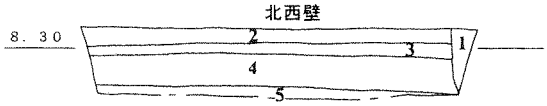
調査区層序図

1　2.5Y6/1 黄灰色砂質土（Fe 少し沈着）
2　2.5Y5/1 黄灰色粘細砂質土
3　7.5YR3/1 黒褐色粘質土（遺物多く含む）
4　2.5Y5/4 黄褐色粘砂質土（地山）

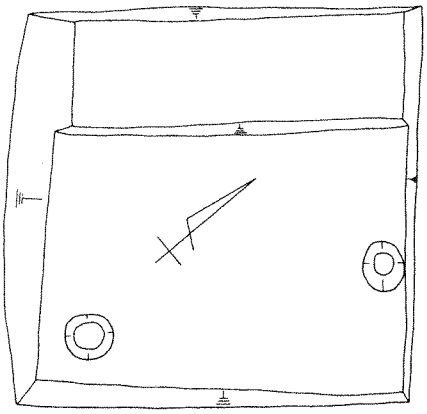


出土遺物

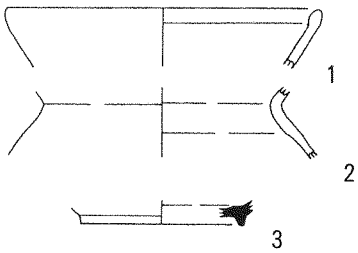
No.17



1　撹乱
2　2.5Y7/3 浅黄色砂質土（Fe 沈着）
3　10YR5/1 褐灰色粘質土（Mn 沈着）
4　10YR3/1 黒褐色粘質土（Mn 沈着、遺物含む）
5　10YR5/4 にぶい黄褐色粘細砂質土（Mn・Fe 少し沈着、地山）



調査区平面・層序図



出土遺物

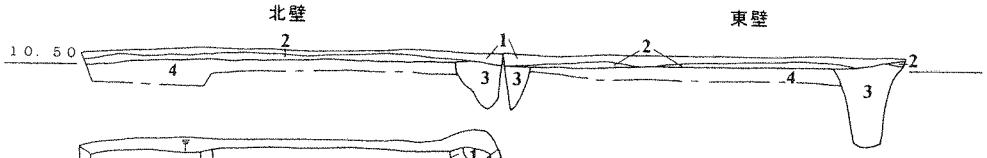
No.37

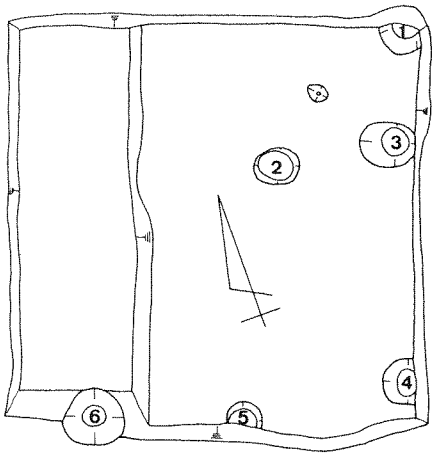
調査区層序図

1　2.5Y6/6 明黄褐色砂質土と 2.5Y7/1 灰白色砂質土撹乱状に混じる（床土）
2　2.5Y4/1 黄灰色細砂質土（遺物含む、Mn 少し沈着）
3　2.5Y5/4 黄褐色砂質土（Fe・Mn 少し沈着、地山）

出土遺物

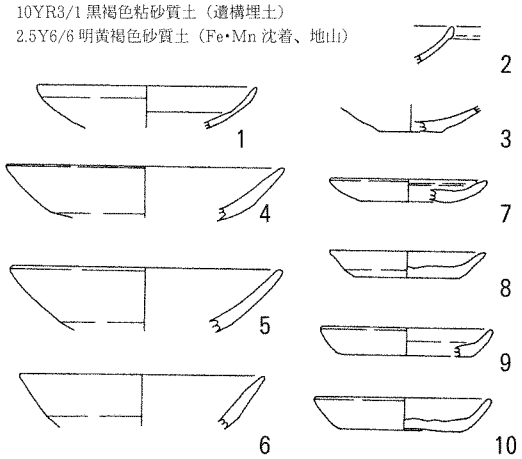
No.31





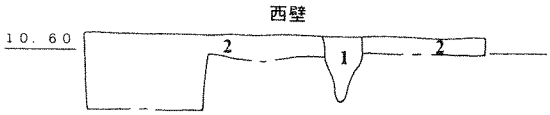
調査区平面・層序図

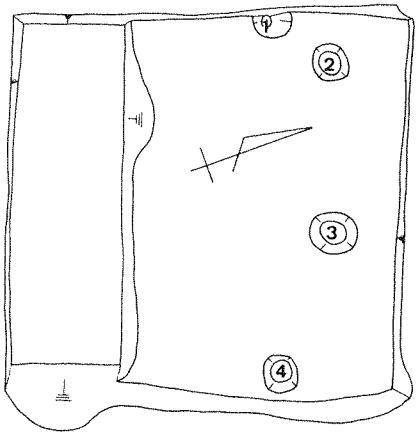
1　2.5Y6/1 黄灰色砂質土（Fe 少し沈着、床土）
2　10YR5/8 黄褐色粘砂質土（Fe 沈着、床土）
3　10YR3/1 黒褐色粘砂質土（遺構埋土）
4　2.5Y6/6 明黄褐色砂質土（Fe･Mn 沈着、地山）



出土遺物（1　遺構 5、2～10　遺構 1）

No.30

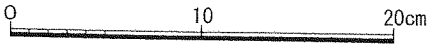




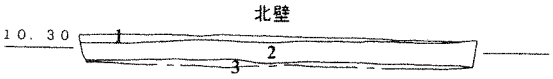
調査区平面・層序図

1　2.5Y6/1 黄灰色細砂質土に 2 ブロック状に混じる（遺構埋土）
2　10YR6/8 明黄褐色砂質土（Fe･Mn 沈着、地山）

出土遺物（遺構 3）



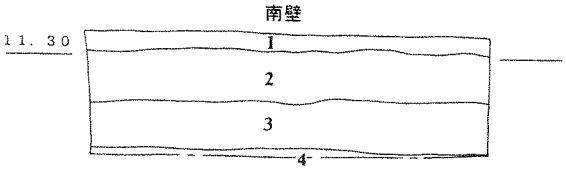
No.32



調査区層序図

1　10YR6/8 明黄褐色細砂質土（床土）
2　2.5Y6/1 黄灰～6/2 灰黄色砂質土（遺物含む）
3　10YR6/6 明黄褐色砂質土（Fe･Mn 沈着、地山）

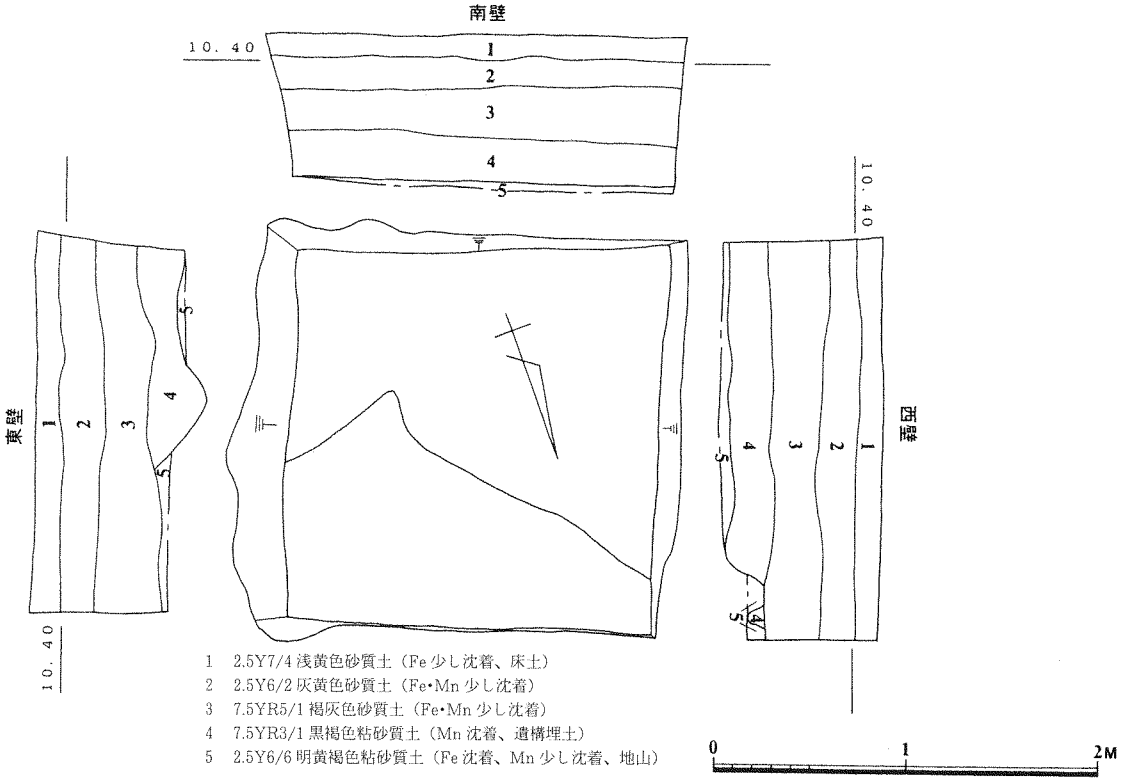
No.50



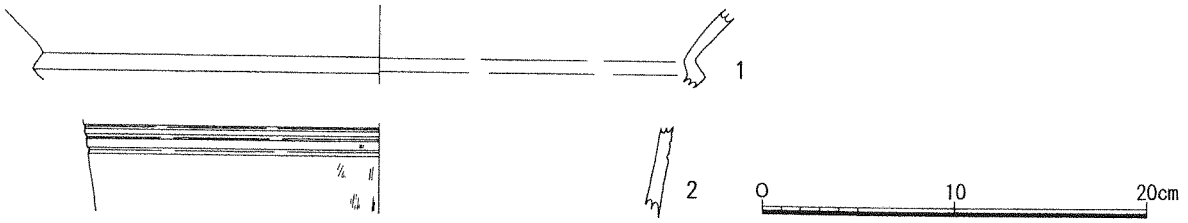
調査区層序図

1　7.5YR6/1 褐灰色砂質土（Fe 少し沈着、床土）
2　5Y6/3 オリーブ黄色砂質土（Fe 沈着）
3　10YR4/1 褐灰色粘砂質土（遺物含む）
4　2.5Y7/2 灰黄色礫混粘砂質土（10～20cm 大の礫）

No.45

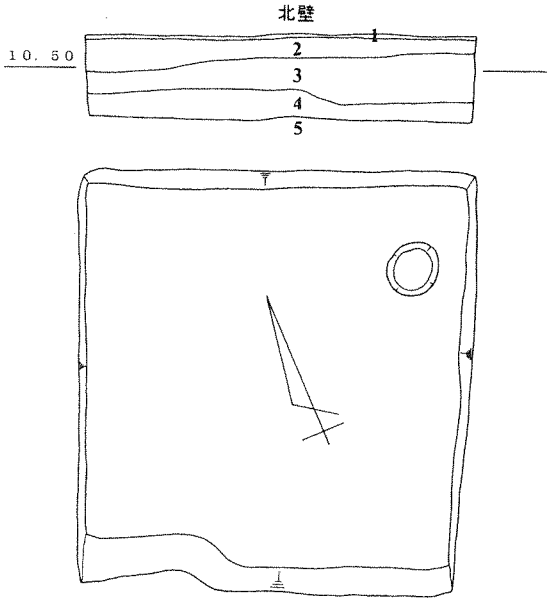


調査区平面・層序図



出土遺物

No.29

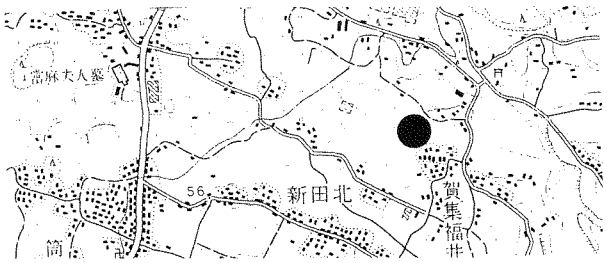


1 10YR6/8 明黄褐色細砂質土（床土）
2 2.5Y5/1 黄灰色砂質土（Fe•Mn 少し沈着）
3 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土（Fe•Mn 少し沈着）
4 2.5Y6/2 灰黄色粘細砂質土
5 10YR6/6 明黄褐色粘砂質土（Fe 沈着、地山）

調査区平面・層序図

高萩（たかはぎ）遺跡　－２次調査－

所 在 地　賀集福井字開発外
事 業 名　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　山崎裕司・谷口梢
種　　別　本発掘調査
調査期間　平成17年12月12日～平成18年１月31日
調査面積　1,170㎡



調査の位置

１　調査内容

調査地は三原平野を流れる主要河川の一つ、大日川の上流域左岸の扇状地に立地する。１次調査（確認調査）の結果を基に、当調査が行われることになった。Ａ・Ｂ・Ｃ－１・Ｃ－２地区で調査を行い、それぞれ遺跡範囲Ａ～Ｃ（Ｐ８参照）に対応する。

【Ａ地区】

１次調査№60の東側10ｍ程の位置に設定した幅３ｍ長さ約25ｍの調査区である。出土遺物は全て小片化しており、詳しい時期はよくわからないが、およそ中世後半頃と思われる。

【Ｂ地区】

１次調査№80の西側約10ｍ程の位置に設定した幅３ｍ長さ約10ｍの小さな調査区である。

遺構３・４・６から弥生時代後期前半頃の遺物が出土している。遺構６出土（１）が最も残りが良く、体部内面はヘラ削りが施されており、外面はタタキ後、頸部付近にハケ調整が行われている。口縁部は「く」字状に屈曲しており、端部に面をもつ。弥生時代後期前半頃と考えられる。

遺構３は２段落ちの形状であることから、竪穴住居の中央土坑である可能性も考えられる。遺構３の東肩部付近には被熱痕および焼土が堆積していた。

遺構２は深さ約10㎝と浅いが、遺構５・８は深さ30～40㎝で竪穴住居柱穴の可能性もある。遺構７は周壁溝の可能性が考えられる。ただし周壁溝の南西側は検出できていない。

【Ｃ－１地区】

約600㎡の面的な調査を行い、検出した柱穴から掘立柱建物１・２が復元できた。

建物１は２×３間（約4.9×6.8ｍ）の母屋部分の周囲に庇が付く構造で、東側にはさらに孫庇が付く。一番外側の柱列は、建物の周囲を囲む柵列あるいは塀と思われる。母屋部分の柱穴は平面形が歪んだ楕円形になっているものがいくつかあり、柱が抜かれたためと推定される。

母屋部分の北西隅では土坑（遺構15）が検出されている。遺構15は南側に人頭大の石が広がり、いくつかは被熱して赤変していた。その上に焼土が堆積し、埋土は炭を多く含む。石の下からは熙寧元寳（1068年初鋳）と聖宋元寳（1101年初鋳）の２枚の古銭が出土している。建物１柱穴との切り合い関係から、遺構15は建物１廃絶後に掘削されたと思われる。

建物２は２×３間（約3.7×5.4ｍ）であるが、建物１よりも小規模で柱穴の並びも悪い。建物１と近接するが、建物１を取り囲む柵列が建物２周辺で途切れていることから、両建物が同時期に建っていた可能性も皆無ではない。

建物柱穴からの出土遺物では、図化できる土師器皿がいくつか出土しており、およそ14世紀後半～15

世紀前半頃と思われる。

【C－2地区】

C－1と隣り合う圃場で465㎡の面的な調査を行ったが、C－1よりも50㎝程低く、かなりの削平を受けていると推定される。出土遺物から弥生時代中期・中世・近世の遺構が混在すると思われるが、埋土にはほとんど違いが無く判別は困難である。

遺構72・38は北方向へ流れていく自然流路と考えられる。遺構72東側肩部から残りの良い弥生時代中期の水差形土器2個体が出土しており、また中世の遺物も出土している。平面的な検出はできなかったが、それぞれの時代の遺構が切り合っていた可能性が高い。

遺構1は、C－1地区建物1柱穴出土土器と法量の近似する土師器皿（20）や東播系須恵器鉢片等が出土していることから、ほぼ同時期と思われる。

遺構18は土師器皿5枚と銅銭5枚が交互に重ねられた状態で出土しており、何らかの祭祀を行った跡と考えられる。土器は比較的磨耗も少ないことから、検出はできなかったが土坑等に納められ、埋め戻されていたと考えられる。土師器皿は建物群の土器よりも器高が低く、体部が開いていることから、若干新しく15世紀後半頃のものと思われる。

これらの他に多くの小穴が検出され、直線的に並ぶものも見られるが、C－1地区建物群とは方位が違っている。ほとんどが近世以降のものではないかと思われる。

2　まとめ

高萩遺跡ではこれまで弥生時代の石鏃等が採集されていたが、当調査により弥生時代中期～後期・中世の遺跡であることが明らかになった。

B地区からは弥生時代後期前半頃の竪穴住居の一部と思われる遺構を検出した。またC地区では弥生時代中期後半のまとまった出土遺物があった。1次調査の成果もあわせ、C地区周辺に中期後半、B地区に後期前半、1次調査№87周辺に弥生時代後期後半頃の小集落が存在したと推定される。

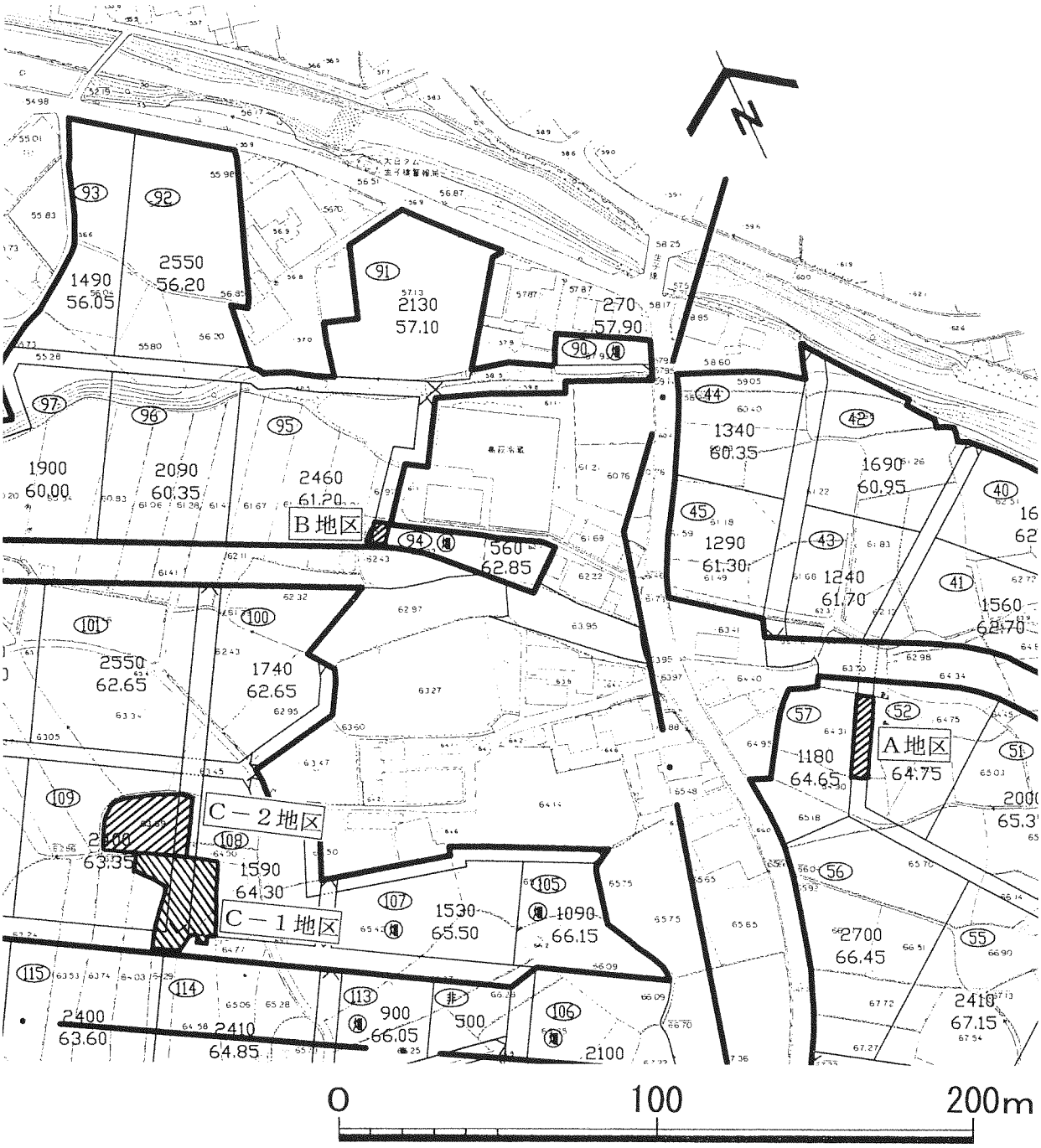
当遺跡では弥生時代終末期の遺構・遺物は確認されなかったが、南東約500mに当該期の祢つノ木遺跡があり、当遺跡と同様、発達した段丘上に立地している。両遺跡が弥生時代の中心的集落と考えられる神子曽遺跡を俯瞰できる位置にあることは、極めて重要と思われる。神子曽遺跡を母集落として、派生した小集落と推定される。

A地区は1次調査№60の調査結果から14～15世紀頃の遺跡の一部と思われるが、出土遺物は小片化しており、検出遺構も少ないことから遺跡縁辺部と思われる。

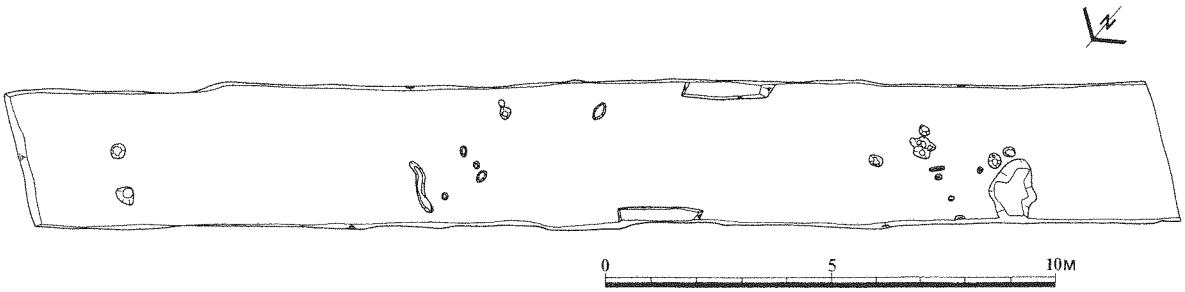
C－1地区からは14世紀後半～15世紀前半頃の建物群が検出され、特に建物1は孫庇を備えた立派な建物である。同じような構造の建物は上久保遺跡（SB03）でも検出されている。（『南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』2008）少量であるが瓦器片等も出土しているため、土地開発の始まりは13世紀後半～14世紀前半頃にまで遡る可能性もある。このような建物があらわれてきた背景として、土地開発が一段落ついて経営基盤が安定したことがあるのではないだろうか。

土師器皿については建物群柱穴出土と遺構18出土に形態的な時期差が見出せ、土師器皿の編年を考えていく上での好資料と言えるだろう。

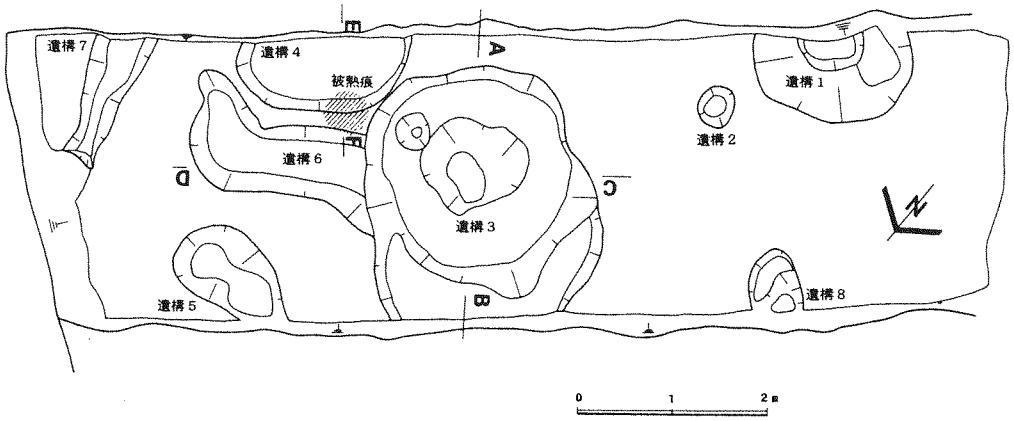
（山崎）



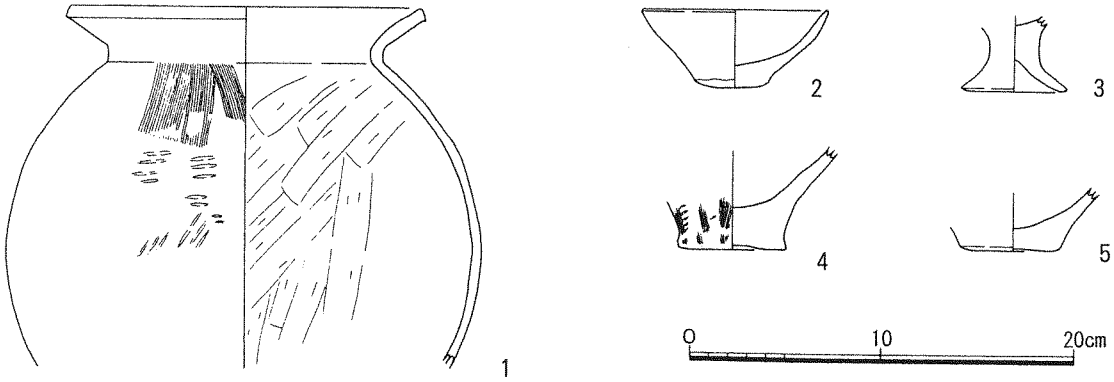
調査区設定図



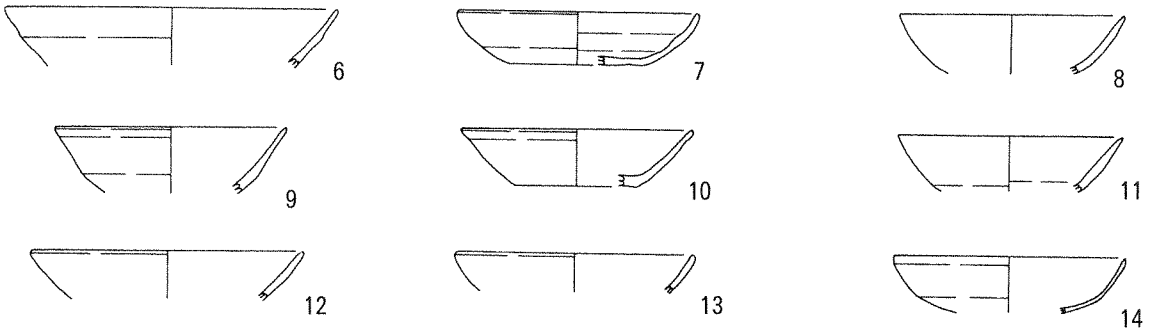
A地区　平面図



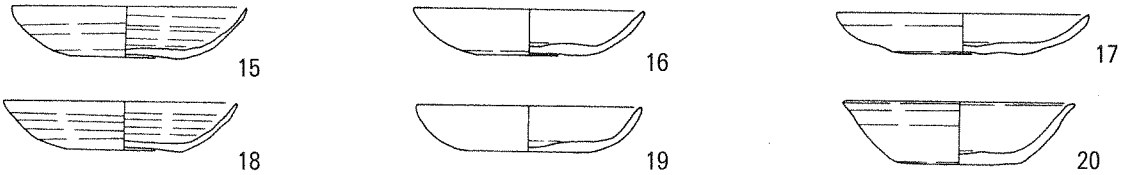
B地区　平面図



B地区　出土遺物（1　遺構6、2～4　遺構3、5　遺構5）



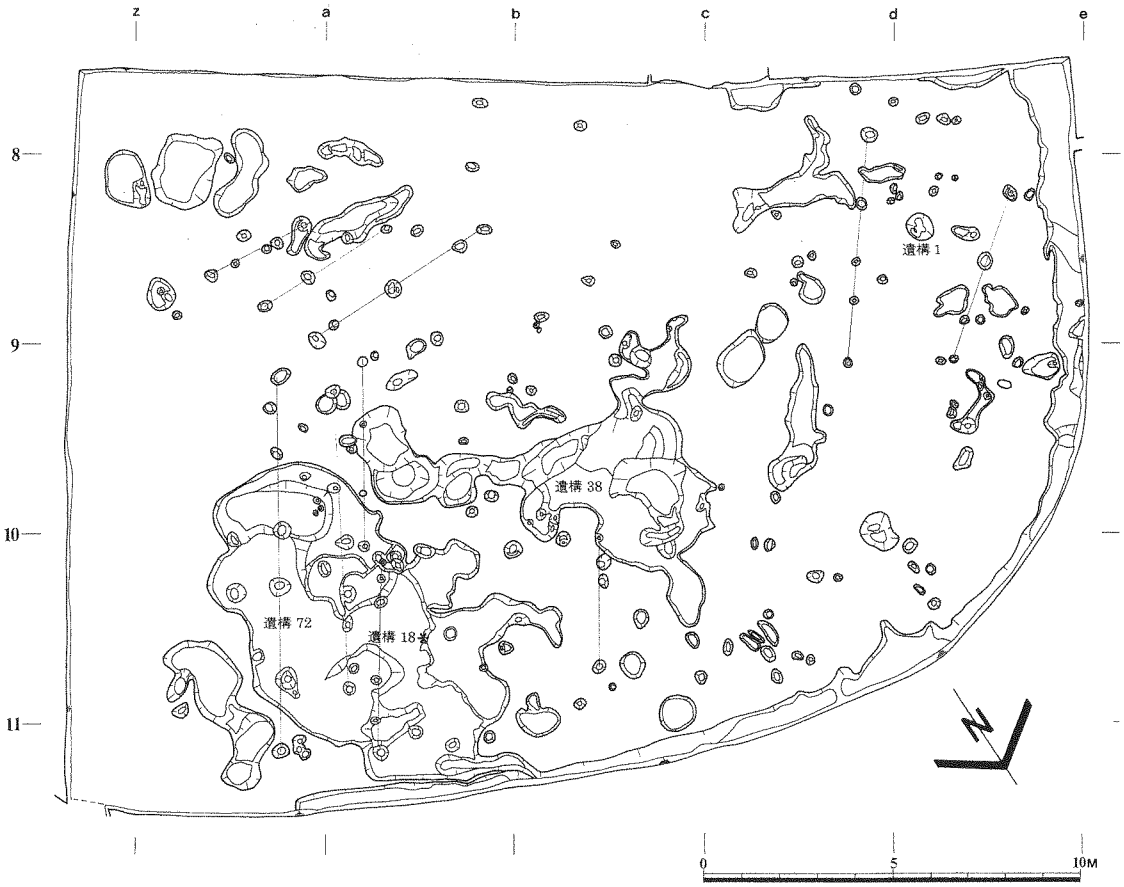
C－1地区　出土遺物（6・9　遺構25、7・10　遺構234、8・11　遺構223、
12　遺構240、13　遺構15、14　遺構13）



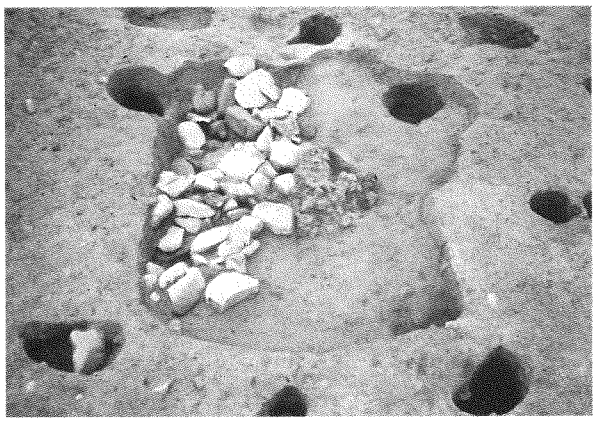
C－2地区　出土遺物（15～19　遺構18、20　遺構1）

1
2
3
4
5
6
7
b
a
z
y
x
遺構 199
遺構 11
柵列
遺構 20
遺構 13
建物 2
遺構 15
遺構 25
建物 1
遺構 240
遺構 223
庇
遺構 234
0
5
10M

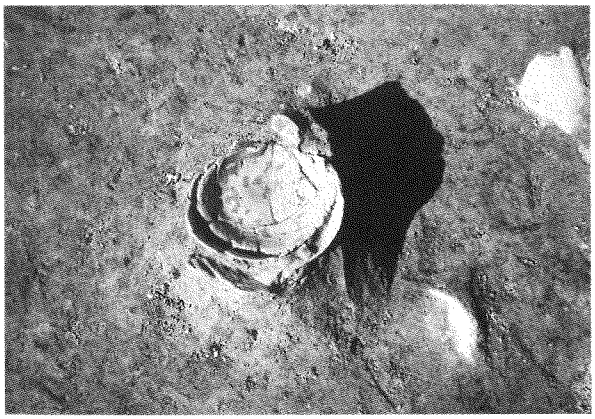
C－1地区　平面図



C－2地区　平面図



C－1地区 遺構15 遺物出土状況（東から）



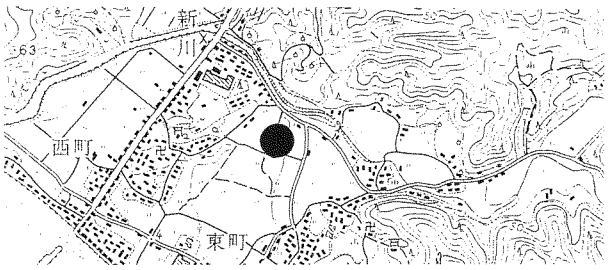
C－2地区 遺構18 遺物出土状況（南から）

C－2地区 遺構72 遺物出土状況（東から）

C－2地区 遺構38 遺物出土状況（北から）

九蔵（くぞう）遺跡　－２次調査－

所 在 地　　阿万東町字九蔵外
事 業 名　　基盤整備促進事業
担 当 者　　山崎裕司・谷口梢
種　　別　　本発掘調査
調査期間　　平成18年１月４日～２月15日
調査面積　　約700㎡



調査の位置

１　調査内容

調査地は南あわじ市の最南端、鴨路川が形成した低平な三角州地形に立地する。１次調査（確認調査）の結果を基に、当調査が行われることになった。Ａ・Ｂ－１・Ｃ－１・Ｃ－２地区で調査を行い、それぞれ遺跡範囲Ａ～Ｃ（Ｐ24参照）に対応している。

【Ａ地区】

約350㎡の面的な調査を行い、検出された柱穴から２棟の掘立柱建物が復元できた。建物１は南北に４間、東西は１間以上の規模である。建物２は南北に３間以上、東西は突出部を除いて１間以上の規模である。建物２の突出部は約半間分の柱間になっていることから、この突出部や建物１・２北側の半間の柱間部分は庇等の付属的な施設の可能性も考えられる。

両建物の柱穴からは、土師器小皿・皿（１・２）や瓦器椀（３）など、およそ12世紀後半～13世紀前半頃の遺物が出土しており、両建物はほぼ同じ方位で建てられていることから、同時期か極めて近接した時期と考えられる。

【Ｂ－１地区】

36㎡の小さな調査区で、調査区北西側は低い段丘面となっている。同一検出面であるが、遺構11～14とそれ以外の遺構は埋土に違いがあり、後述するように時期が違う。

建物１は、隣接して行われた兵庫県教育委員会による発掘調査により、２×３間の側柱建物の一部であることが明らかになっている。８～９世紀頃の建物と思われる。遺構11・12もこれと同じような時期であろう。堆積層からこの時期の遺物（１・２）が出土している。

建物２は、南北が２間以上、東西が突出部を除いて２間以上の総柱の掘立柱建物である。建物の時期を示す出土遺物は無いが、埋土から中世後半頃ではないかと思われる。

また堆積層からは、弥生時代終末期～古墳時代初頭頃の壷（５）や東阿波型甕（４）が残りの良い状態で出土していることから、周辺にこの時期の遺構が広がっていることは確実と思われる。

【Ｃ－１地区】

幅４ｍ長さ約63ｍの調査区である。中世～近世の第１遺構面と、縄文時代晩期～中世初頭の第２遺構面に分かれる。第２遺構面は北西方向に低くなり、調査区両端の比高差は約1.5ｍである。

第１遺構面では、調査区南東側を中心に掘立柱建物等が検出できた。建物１は東西３間以上、南北は半間の突出部を除いて２間以上の総柱建物である。建物２は突出部を除き東西３間、南北２間以上の総柱建物である。建物３は東西１間、南北２間以上の規模である。建物４は東西・南北とも１間以上の規模である。

建物２の柱穴から中世の須恵器皿（１・４・５）や土師器小皿（３）が出土しており、およそ13世紀後半～14世紀前半頃と思われる。建物１～４はほぼ同じ方位で建てられていることから、同じような時期に建てられたと考えられる。

第２遺構面の遺構19・23・222・260は出土遺物や埋土から中世初頭の遺構であることが明らかになった。遺構222は北東から南西方向に流れる溝状の遺構である。12世紀後半から13世紀前半頃の土器が極めて多く出土し、完形に近いものも多く見られるため、単なる流れ込みとは考えにくい。遺構23は土師器小皿８枚以上が重なった状態で出土しており、地鎮祭祀等を行ったと思われる。古銭は出土していない。土師器小皿（１～７）は法量・形態が遺構222のものと近似しており、同じような時期の遺構と考えられる。

遺構75は、当調査区南側で行われた兵庫県教育委員会の発掘調査でも検出されており、律令期に掘削された大規模な溝（堀）のようである。これは現在の耕地境界線に沿っており、上層には近世と思われる暗渠も検出されており、規模が小さくなるが近世まで耕地境界線の溝として機能していたようである。

遺構６・140は縄文時代晩期の土坑である。滋賀里Ⅲｂ式と思われる土器片と共に、石器製作の屑と思われる多くのサヌカイト片、被熱した礫、骨片等が出土し、廃棄を目的とした土坑と考えられる。遺構６の北西側には多くの遺構が密集している。ほとんどは縄文時代晩期の遺構と思われるが、堆積層からは弥生時代前期の遺物も出土していることから、弥生時代前期の遺構も含まれている可能性がある。

【Ｃ－２地区】

約65㎡の面的な調査を行ったが、自然地形と思われる浅い窪み２ヶ所を検出したのみである。堆積層からは古代～中世の遺物が出土している。遺跡縁辺部と思われる。

２　まとめ

当調査により、縄文時代晩期に集落が営まれていたことが明らかになった。遺構６・140は廃棄土坑と思われ、縄文時代中期の廃棄土坑は神子曽遺跡で検出されているが、縄文晩期の遺構は市内で始めての検出となる。

律令期の８～９世紀頃の遺構が、Ｂ－１・Ｃ－１地区で検出された。Ｂ－１地区の南側に隣接して行われた兵庫県教育委員会の発掘調査によって、官衙建物の検出や銀製の和同開珎が出土するなど、九蔵遺跡は律令期の官衙遺跡として一躍淡路島を代表する遺跡となった。当調査は小規模ながら、県の調査を補完する調査成果を得ることができた。Ｃ－１地区で検出した溝（遺構75）は、北側は鴨路川に接続し、南は微高地を横断すると推定される極めて大規模なもので、官衙遺跡と密接な関係をもって造成されたと推定される。次年度以降、これより南側の地区で確認調査等が行われる予定であり、遺跡の範囲や性格等、さらに多くのことがわかってくるに違いない。

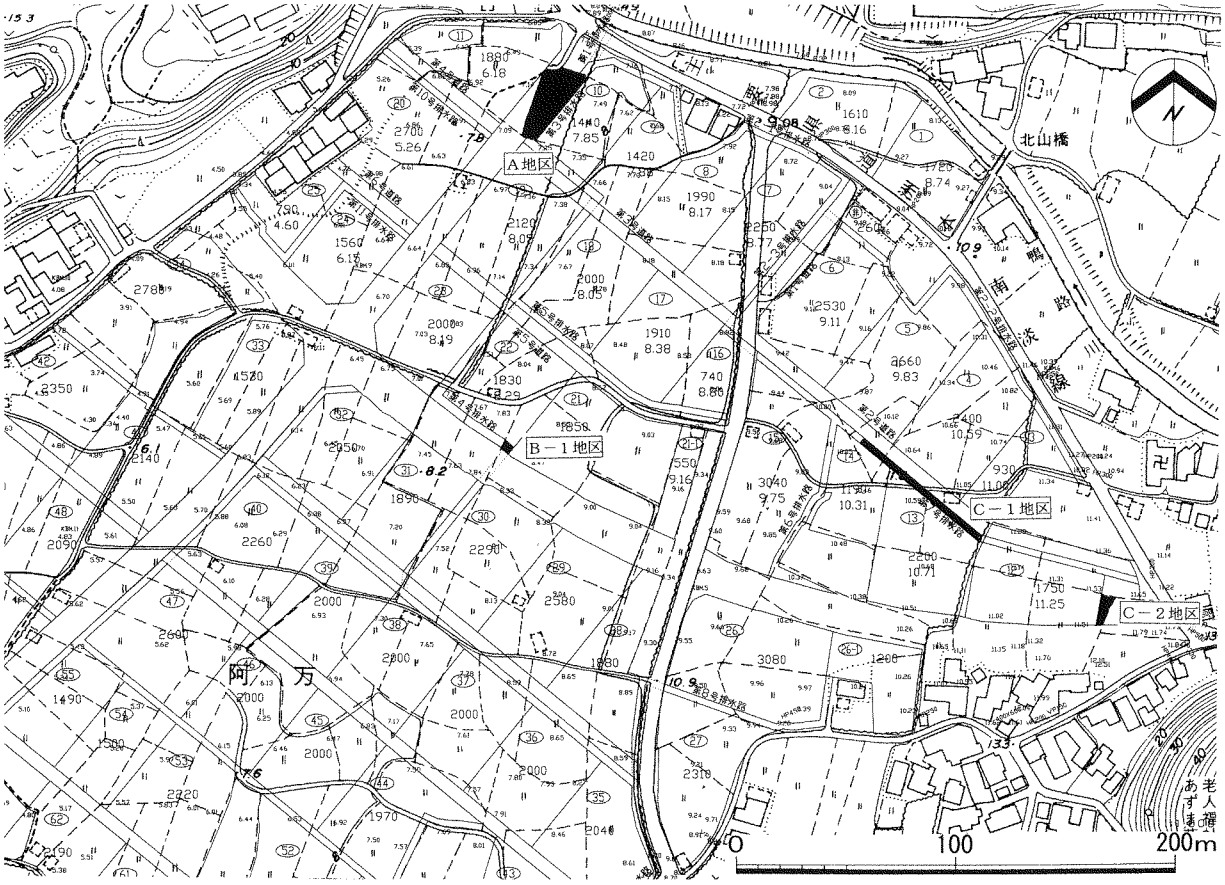
Ｃ－１地区やＡ地区の調査によって、古代末から中世初頭における耕地開発の実態が少しずつ明らかになってきたと言えるであろう。Ｃ－１地区の遺構222やこれより北西側の低い場所は、12世紀後半から13世紀前半に厚い客土で埋められ、耕地化されていったようである。客土は古代の遺物を含み、南側の微高地を掘削したものと推定され、次第に現在のような凹凸の少ない地形へ変わっていったのだと思われる。

またＣ－１地区の遺構222や遺構23の出土遺物は、耕地開発に伴う祭祀と関係するのではないかと思われる。遺構222についても、わずかに古代の出土遺物が含まれるものの、完形のものを中心とした土

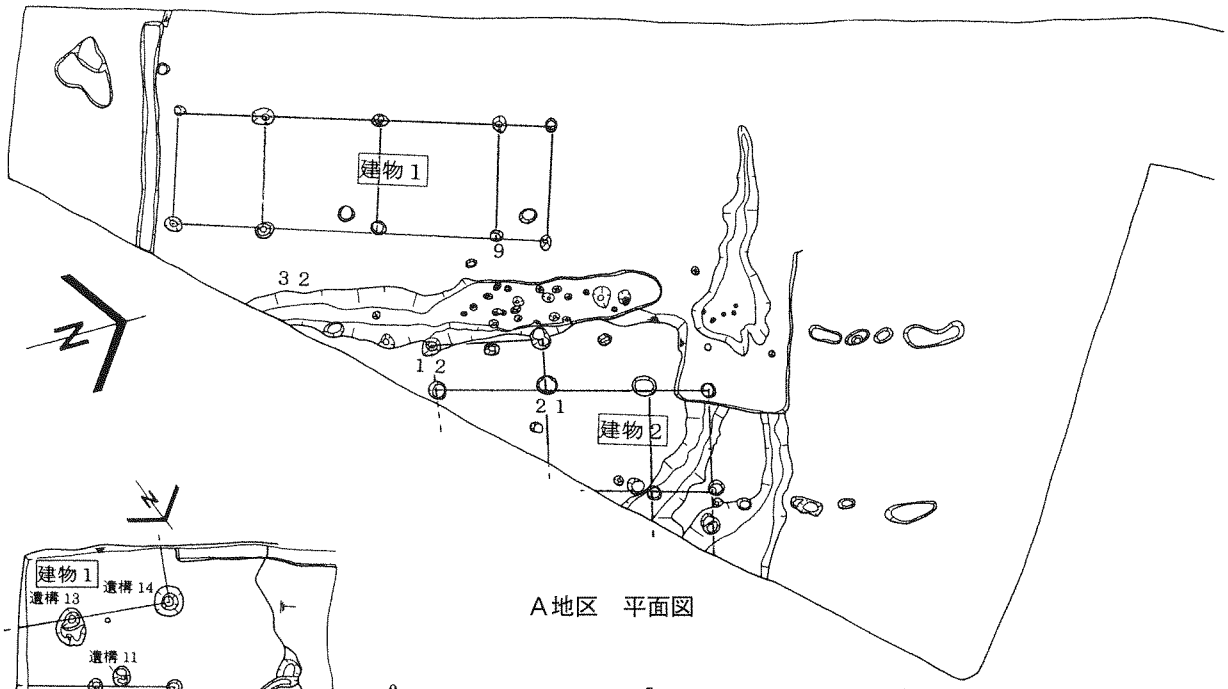
器群は、極めて一括性が高い資料と考えられる。十瓶山窯産と思われる須恵器甕（１）や和泉型と思われる瓦器椀（４～６）、土師器の椀（２・３）・皿（７・８）・小皿（９～12）など、当時の土器様相を示す好資料と言えるだろう。

Ａ地区の建物群も12世紀後半から13世紀前半と考えられ、周辺の低地における耕地開発に伴い、段丘上に一時的に建物が建てられたと推定される。

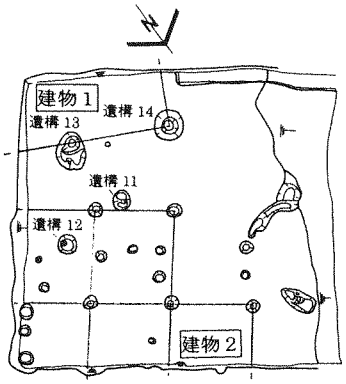
「淡路国大田文」（1223年）によると、「得長壽院并八幡宮御領」として「阿万庄」の田百三町が記されており、三原郡において賀集荘に次ぐ耕地面積をもつ大きな荘園であった。当遺跡の発掘成果は、荘園内で盛んに行われていた耕地開発の実態の一端を示すものと言えるのではないだろうか。九蔵遺跡は古代のみならず中世の遺跡としても、極めて重要な遺跡である。　（山崎）



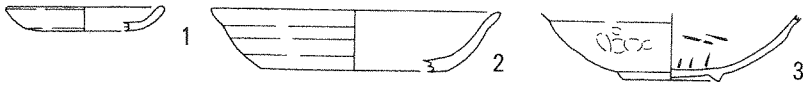
調査区設定図



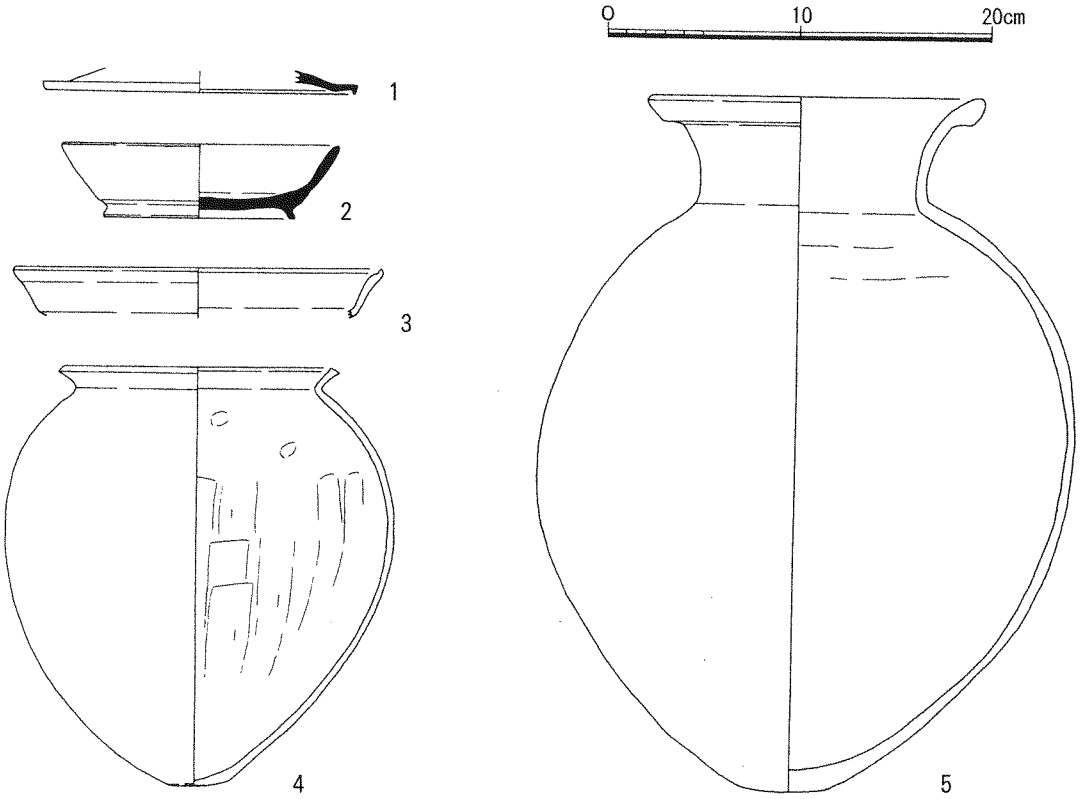
A地区　平面図



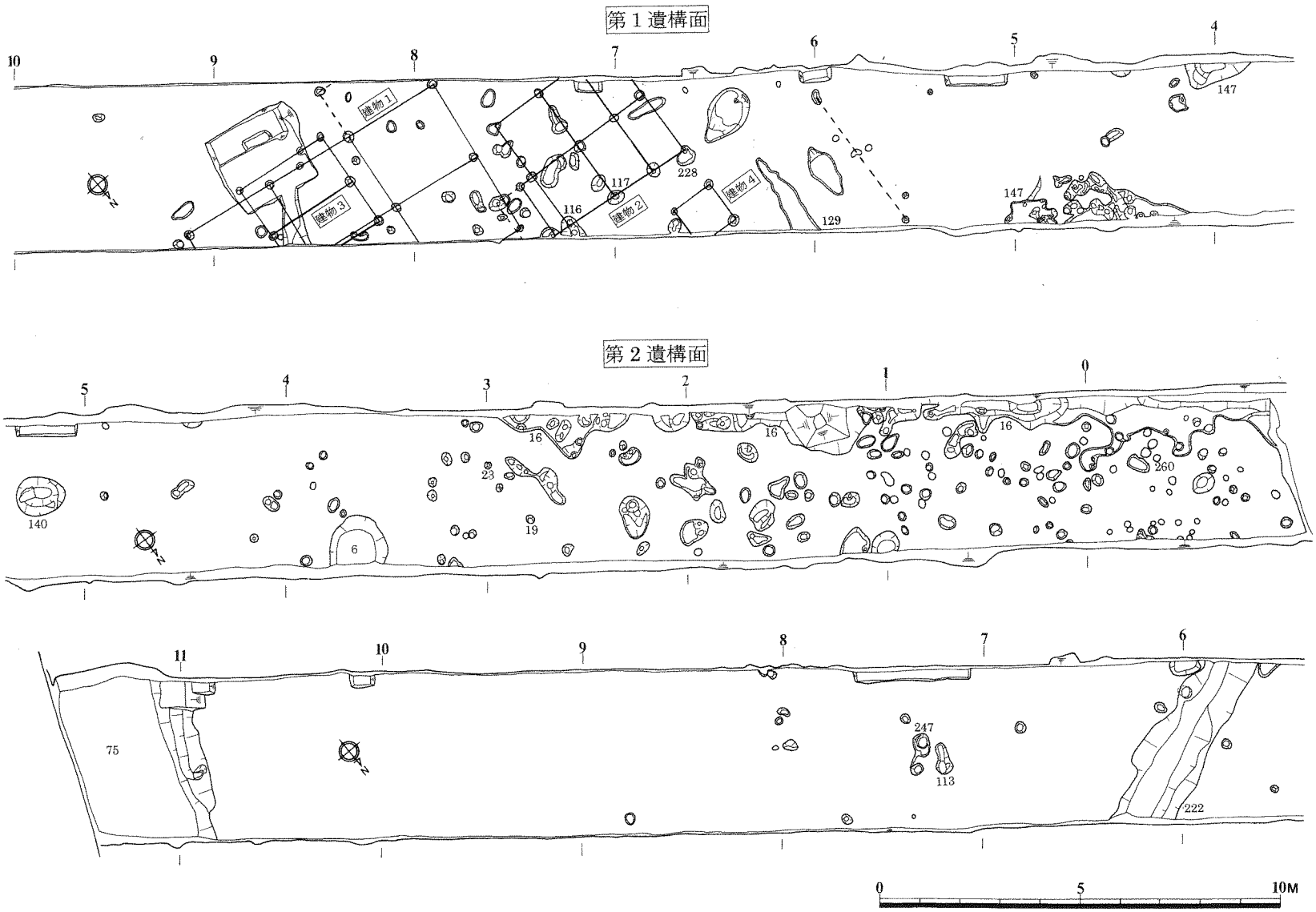
B－1地区　平面図



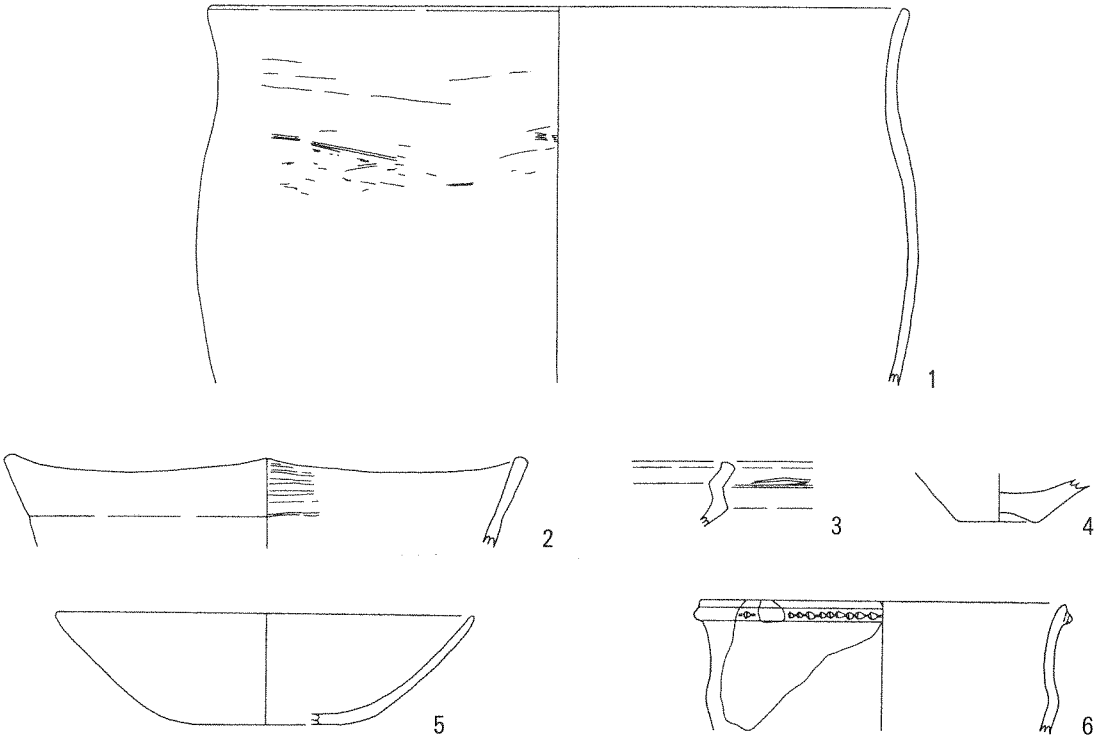
A地区　出土遺物（1　遺構9、2　遺構12、3　遺構21）



B－1地区　出土遺物（3　遺構11）

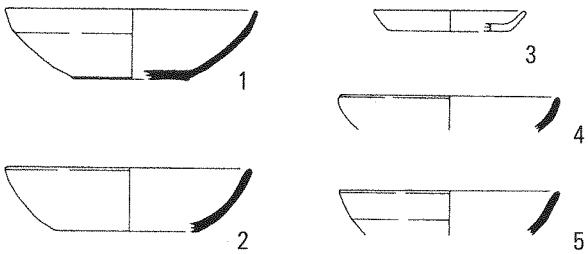

第１遺構面
建物１
建物２
建物３
建物４
117
116
228
129
147
147
第２遺構面
140
6
23
19
16
16
16
260
75
247
113
222
0
5
10M

Ｃ－１地区　平面図



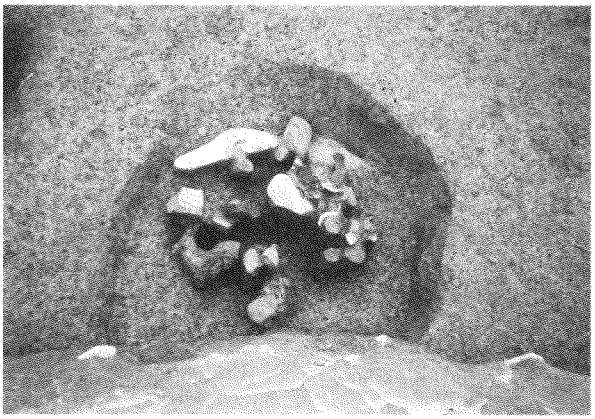
C－1地区　第2遺構面　出土遺物
（1　遺構140、2～5　遺構6）

0　10　20cm

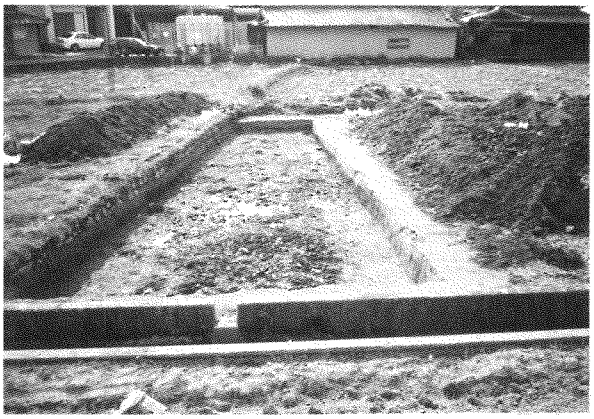


C－1地区　第1遺構面　出土遺物
（1　遺構116、2　遺構129、3・4　遺構228、
5　遺構117）

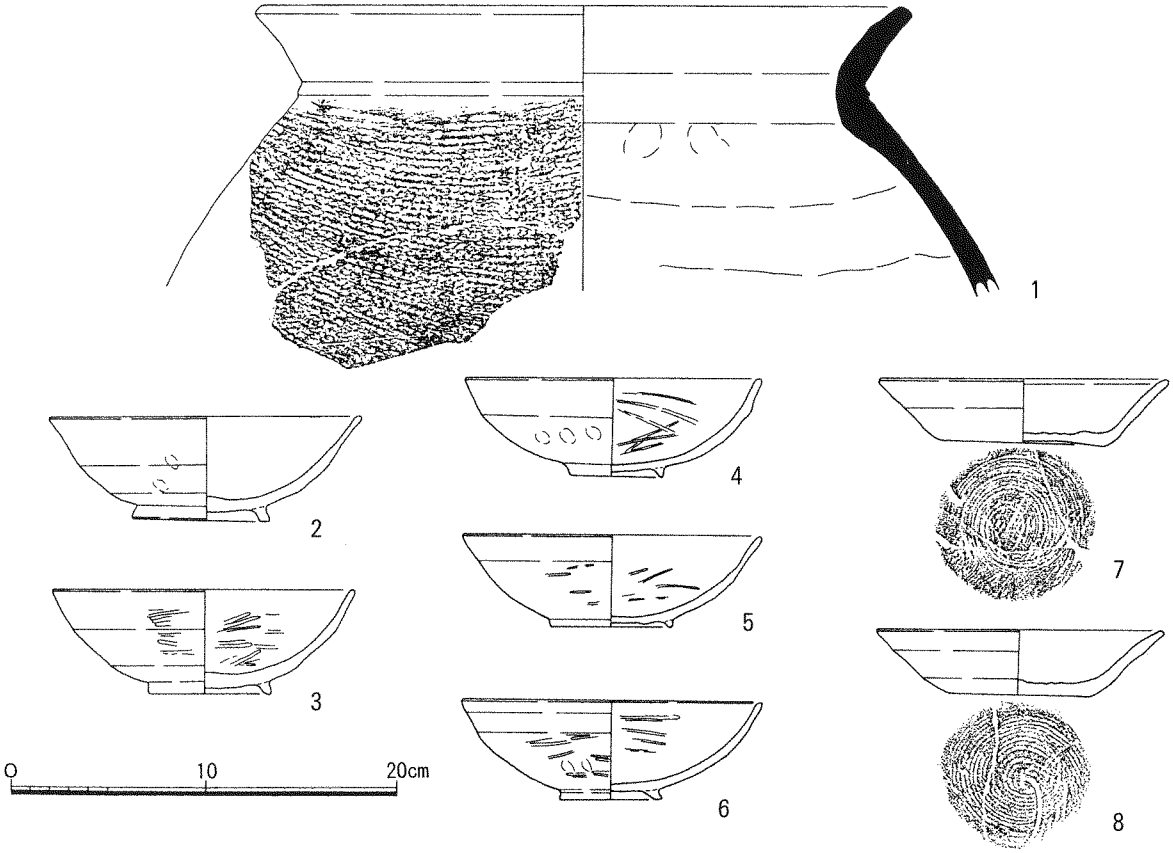
C－1地区 遺構140 遺物出土状況（北から）

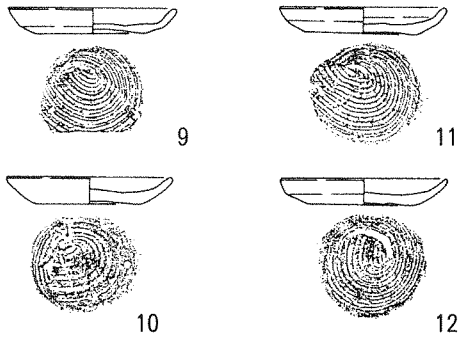


C－1地区 遺構6 遺物出土状況（北東から）



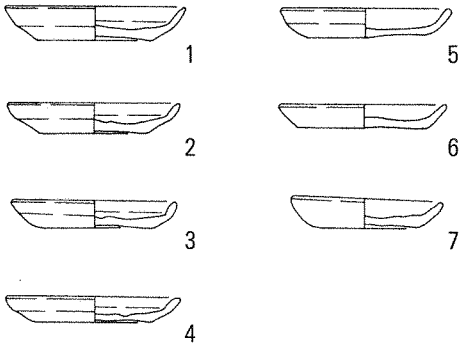
C－2地区 完掘状況（北から）





C－1地区　第2遺構面
遺構222　出土遺物

C－1地区 遺構222 遺物出土状況（南から）

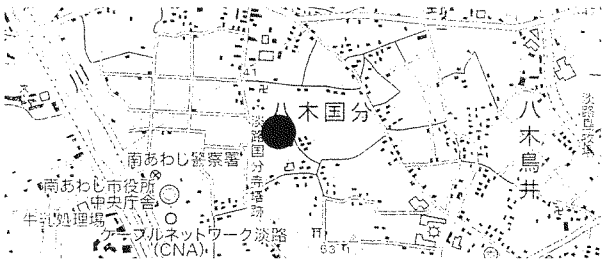


C－1地区　第2遺構面
遺構23　出土遺物

C－1地区 遺構23 遺物出土状況（南東から）

淡路国分寺（あわじこくぶんじ）　－16次調査－

所 在 地　八木国分
事 業 名　特定環境公共下水道事業
担 当 者　山崎裕司・谷口梢
種　　別　立会調査
調査期間　平成18年２月２日～２月８日
調査面積　約100㎡



調査の位置

1　調査内容

淡路国分寺では1984～1988年にかけて確認調査が実施されており、寺域及び主要伽藍配置等が明らかになっている。

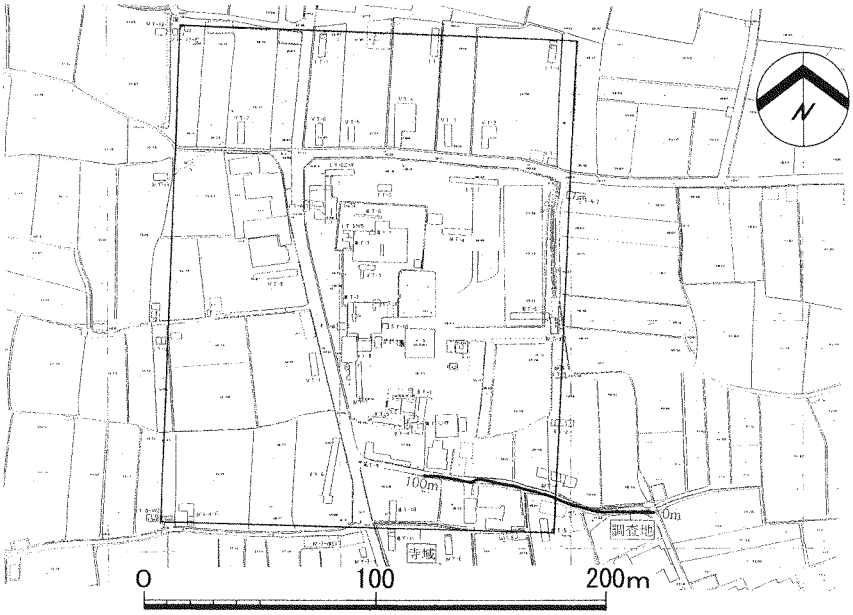
上記事業を行うに当り、淡路国分寺の寺域南東部から寺域外にかけて伸びる道路内の幅約１ｍ、約100ｍ間で立会調査を行うことになった。

調査地が道路内であることから、水道管敷設に伴う工事等の影響で、全ての範囲において地山上に厚い撹乱層が堆積していた。寺域東限の推定位置においても溝等は検出されず、遺構面についてもかなりの深さまで掘削が及んでいると考えられる。

撹乱層からの出土になるが、軒平瓦03形式（『淡路国分寺』三原町教育委員会 1993）の瓦当が出土している。

2　まとめ

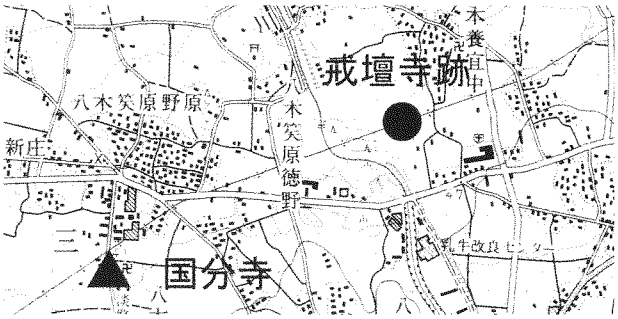
国分寺東限の溝の検出等が予想されたが、遺構および包含層は削平されて全く残っておらず、残念な結果に終わった。（山崎）



調査区設定図

第3章　資料紹介

戒壇寺（かいだんじ）跡採集軒平瓦（個人蔵）



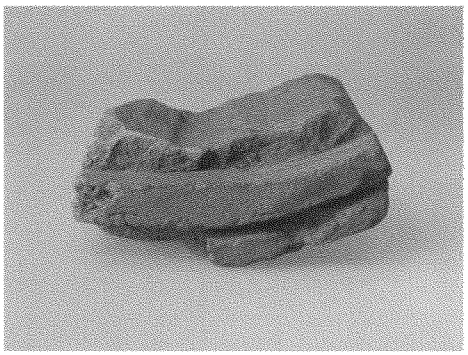
遺跡の位置

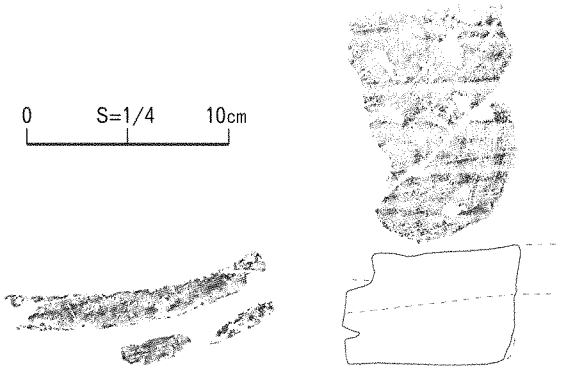
本資料は、戒壇寺跡採集の軒平瓦である。戒壇寺跡は、南あわじ市八木養宜中の成相川中流右岸に立地する寺院跡と考えられる遺跡である。成相川を挟んで約1.1km南西には奈良時代後半に創建された淡路国分寺跡が位置しており、国分寺跡と戒壇寺跡の間を東西に古代官道である南海道が想定される。発掘調査が実施されていないため詳細は不明であるが、今回紹介する軒平瓦以外にも国分寺跡と同笵関係にある瓦などが幾つか採集されており、採集量も比較的多い。

採集された瓦は、重弧文軒平瓦で瓦当部分を中心とする資料である。重弧文の一番上は欠損するが、三重弧文に復元でき、高さ5.7cm・残存長8.4cmを計測する。側面がヘラ削り、凸面はナデ調整が施される。凹面には糸切り・布目痕と模骨痕と思われる凹凸が幅2cm前後の間隔で認められることから、粘土板による桶巻き作りと考えられる。顎形態を見ると、顎面に粘土を貼り付けて平瓦部分と段を有する段顎Ⅰ類に分類される。さらに残存長の約8cmが顎長となり、瓦当厚よりも長いＩＬ類に細分できる。平城宮・京出土の平瓦は、平城Ⅱ期（721（養老５）年頃～745（天平17）年）に一枚作りが桶巻き作りを卓越する。また顎形態は、段顎から直線顎あるいは曲線顎に変化し、段顎も顎が長い（ＩＬ）ものから短い（ＩＳ）ものに変化し、Ⅲ期（745（天平17）年～757（天平宝字元）年）には段顎は残らないと考えられている（註１）。

島内で重弧文軒平瓦が出土又は採集されている遺跡は、戒壇寺跡の他には庄慶陶瓦窯跡（洲本市大野）のみが知られており、出土した須恵器から７世紀後半から８世紀初頭頃が想定される（註２）。

以上の通り、古代寺院が少ない淡路島にあって、本資料は技法・文様的に奈良時代後半に創建された淡路国分寺跡に先行する軒平瓦と考えられ、今後の調査が非常に注目される。　（坂口）





戒壇寺跡採集軒平瓦

参考文献

註１『平城宮発掘調査報告ＸⅢ－内裏の調査－Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1991年

註２「淡路島古窯址出土の須恵器について」『淡路地方史研究会』浦上雅史 1980年

2009年3月31日発行

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ

2005年度　埋蔵文化財調査

発 行　　南あわじ市教育委員会

編 集　　南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衙１１００

TEL　０７９９－４２－３８４９

印 刷　　浜田タイプ

〒656-0521 兵庫県南あわじ市潮美台２丁目６－５

TEL　０７９９－５２－１０８０